

3124  
26.7



遠野物語

三百五十部ノ内第 五三 號

明治  
43. 6. 17  
内交

此書を外國に在る人々に呈す

此話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり。昨明治四十二年の二月頃より始めて夜分折々訪ね來り此話をせられしを筆記せしなり。鏡石君は話上手には非ざれども誠實なる人なり。自分も亦一字一句をも加減せず感じたるまゝを書きたり。思ふに遠野郷には此類の物語猶數百件あるならん。我々はより多くを聞かんことを切望す。國內の山村にして遠野より更に物深き所には又無數の山神山人の傳説あるべし。願はくは之を語りて平地人を戦慄せしめよ。此書の如きは陳勝吳廣のみ。

昨年八月の末自分は遠野郷に遊びたり。花巻より十餘里の路上には町場三ヶ所あり。其他は唯青き山と原野なり。人

煙の稀少なること北海道石狩の平野よりも甚だし、或は新道なるが故に民居の來り就ける者少なきか。遠野の城下は則ち煙花の街なり、馬を驛亭の主人に借りて獨り郊外の村を巡りたり、其馬は躰き海草を以て作りたる厚總を掛けたり、虻多き爲なり、猿ヶ石の溪谷は土肥えてよく拓けたり、路傍に石塔の多きこと諸國其比を知らず、高處より展望すれば早稲正に熟し、晚稻は花盛にて水は悉く落ちて川に在り、稻の色合は種類によりて様々なり、三つ四つ五つの田を續けて稻の色の同じきは即ち一家に屬する田にして所謂名處イナヅメの同じきなるべし、小字より更に小さき區域の地名は持主に非ざれば之を知らず、古き賣買讓與の證文には常に見ゆる所なり、附馬牛の谷へ越ゆれば早地峯の山は淡く霞

み山の形は菅笠の如く又片假名のへの字に似たり、此谷は稻熟すること更に遅く満目一色に青し、細き田中の道を行けば名を知らぬ鳥ありて雛を連れて横ざりたり、雛の色は黒に白き羽まじりたり、始は小さき雛かと思ひしが溝の草に隠れて見えざれば乃ち野鳥なることを知れり、天神の山には祭ありて獅子踊あり、茲にのみは輕く塵たち紅き物聊かひらめきて一村の緑に映じたり、獅子踊と云ふは鹿の舞なり、鹿の角を附けたる面を被り童子五六人劍を抜きて之と共に舞ふなり、笛の調子高く歌は低くして側にあれども聞き難し、日は傾きて風吹き酔ひて人呼ぶ者の聲も淋しく女は笑ひ兒は走れども猶旅愁を奈何ともする能はざりき、盃蘭盆に新しき佛ある家は紅白の旗を高く揚げて魂を招

く風あり。峠の馬上に於て東西を指點するに此旗十數所あり。村人の永住の地を去らんとする者ごかりそめに入り込みたる旅人と又かの悠々たる靈山とを黄昏は徐に來りて包容し盡したり。遠野郷には八ヶ所の觀音堂あり。一木を以て作りしなり。此日報賽の徒多く岡の上に燈火見え伏鉦の音聞えたり。道ちがへの叢の中には雨風祭の藁人形あり。恰もくたびれたる人の如く仰臥してありたり。以上は自分が遠野郷にて得たる印象なり。

思ふに此類の書物は少なくも現代の流行に非ず。如何に印刷が容易なればとてこんな本を出版し自己の狹隘なる趣味を以て他人に強ひんとするは無作法の仕業なりと云ふ人あらん。されど敢て答ふ。斯る話を聞き斯る處を見て來

て後之を人に語りたがらざる者果してありや。其様な沈黙にして且つ慎深き人は少なくも自分の友人の中にはある事なし。況や我が九百年前の先輩今昔物語の如きは其當時に在りて既に今は昔の話なりしに反し此は是目前の出來事なり。假令敬虔の意と誠實の態度とに於ては敢て彼を凌ぐことを得と言ふ能はざらんも人の耳を経ること多からず人の口と筆とを情ひたること甚だ僅かなりし點に於ては彼の淡泊無邪氣なる大納言殿却つて來り聽くに値せり。近代の御伽百物語の徒に至りては其志や既に陋且つ決して其談の妄誕に非ざること誓ひ得ず。尙に以て之と鄰を比するを恥とせり。要するに此書は現在の事實なり。單に此のみを以てするも立派なる存在理由ありと信ず。唯鏡石子

は年僅に二十四五自分も之に十歳長するのみ。今の事業多  
き時代に生れながら問題の大小をも辨へず其力を用ゐる  
所當を失へりと言ふ人あらば如何。明神の山の木兔の如く  
あまりに其耳を尖らしあまりに其眼を丸くし過ぎたりと  
責むる人あらば如何。はて是非も無し此責任のみは自分が  
負はねばならぬなり。

おきなさび飛ばす鳴かざるをちかたの森のふくろふ  
笑ふらんかも

柳田國男

### 題目

(下の數字は話の番號なり頁數には非ず)

地勢	一五、六七、一一一
神の始	二六、九、七四
里の神	九八
カクラサマ	七二、七四
ゴングサマ	一一〇
家の神	一六
オクナイサマ	一四、一五、七〇
オシラサマ	六九
ザシキワラシ	一七、一八

山の神 八九一九二、九三、一〇一、一〇七、一〇八  
 神女 二七、五四  
 天狗 二九、六二  
 山男 五、六、七、九、一八、三〇、三二、九二  
 山女 三、四、三三、三五、七五  
 山の靈異 三三、三三、六一、九五  
 仙人堂 四九  
 蝦夷の跡 一一二  
 塚と森と 六六、一一一、一二三、一四  
 姥神 六五、七一  
 館の址 六七、六八、七六  
 昔の人 八一〇、一一一、一二三、一二六、八四

家のさま 八〇、八三  
 家の盛衰 一三、一八、一九、二四、二五、三八、六三  
 マヨヒガ 六三、六四  
 前兆 二〇、五二、七八、九六  
 魂の行方 二二、八六、八八、九五、九七、九九、一〇〇  
 まぼろし 二三、七七、七九、八一、八二  
 雪女 一〇三  
 河童 五五、五九  
 猿の經立 四五、四六  
 猿 四七、四八  
 狼 三六、四二  
 熊 四三

狐

六〇、九四、一〇一

色々の鳥

五一、五三

花

三三、五〇

小正月の行事

一四、一〇一、一〇五

雨風祭

一〇九

昔々

一一五、一二八

歌謠

二一九

# 遠野物語

遠野郷は今の陸中上閉伊郡の西の半分、山々にて取  
 囲まれたる平地なり。新町村にては遠野、土淵、附馬、牛松、崎、青  
 笹、上郷、小友、綾織、館澤、宮守、達會部の一町十ヶ村に分つ。近代  
 或は西閉伊郡とも稱し、中古には又遠野保とも呼べり。今日  
 郡役所の在る遠野町は即ち一郷の町場にして、南部家一萬  
 石の城下なり。城を横田城とも云ふ。此地へ行くには花巻の  
 停車場にて瀛車を下り、北上川を渡り、其川の支流、猿ヶ石川



○遠野郷のトイは  
しとアイヌ語の湖  
といふ語より出で  
たるなるべしナ  
イもアイヌ語なり

○この一里は小道  
即ち坂東道なり六  
一里が五丁又は六  
丁なり

○タツソベしアイ  
ヌ語なるべし岩手

の溪を傳ひて東の方へ入ること十三里遠野の町に至る。山  
奥には珍らしき繁華の地なり。傳へ言ふ遠野郷の地大昔は  
すべて一圃の湖水なりしに其水猿ヶ石川と爲りて人界に  
流れ出でしより自然に此の如き邑落をなせしなりとされ  
ば谷川のこの猿ヶ石に落合ふもの甚だ多く俗に七内八崎  
ありと稱す。内は澤又は谷のことにて奥州の地名には多く  
あり。

二 遠野の町は南北の川の落合に在り以前は七十里  
とて七つの溪谷各七十里の奥より賣買の貨物を聚め其市  
の日は馬千匹六千人の賑はしきなりき。四方の山々の中に  
最も秀でたるを早地峯と云ふ北の方附馬牛の奥に在り。東  
の方には六角牛山立てり石神と云ふ山は附馬牛と達曾部

郡玉山村にも同じ  
大字あり

○上郷村大字來  
内ライナイイ  
イヌ語にてライは  
死のことナイは澤  
なり水の静かた  
るよりの名か

○土淵村大字栃内

この間に在りてその高さ前の二つよりも劣れり。大昔に女  
神あり三人の娘を伴ひて此高原に來り今の來内村の伊豆  
權現の社ある處に宿りし夜今夜よき夢を見たらん娘によ  
き山を與ふべしと母の神の語りて寢たりしに夜深く天よ  
り靈華降りて姉の姫の胸の上に止りしを末の姫眼覺めて  
窃に之を取り我胸の上に載せたりしかば終に最も美しき  
早地峰の山を得姉たちは六角牛と石神とを得たり。若き三  
人の女神各三の山に住し今も之を領したまふ故に遠野の  
女どもは其妬を畏れて今も此山には遊ばすと云へり。

三 山々の奥には山人住めり。栃内村和野の佐々木嘉兵  
衛と云ふ人は今も七十餘にて生存せり。此翁若かりし頃獵  
をして山奥に入りしに遙かなる岩の上に美しき女一人あ

○土淵村大字山  
口吉兵衛は代々  
通稱なれば此主  
人も亦吉兵衛ならん

りて、長き黒髪を梳りて居たり。顔の色極めて白し。不敵の男  
なれば直に銃を差し向けて打ち放せしに、弾に應じて倒れ  
たり。其處に馳け付けて見れば、身のたけ高き女にて、解きた  
る黒髪は又そのたけよりも長かりき。後の験にせばやと思  
ひて其髪をいさゝか切り取り、之を結ねて懐に入れ、やがて  
家路に向ひしに、道の程にて耐へ難く睡眠を催しければ、暫  
く物陰に立寄りてまどろみたり。其間夢と現との境のやう  
なる時に、是も丈の高き男一人近よりて懐中に手を差し入  
れ、かの縮ねたる黒髪を取り返し立去ると見れば、忽ち睡は  
覺めたり。山男なるべしと云へり。

四 山口村の吉兵衛と云ふ家の主人根子立と云ふ山に  
入り、笹を刈りて束と爲し擔ぎて立上らんとする時、笹原の

上を風の吹き渡るに心付きて見れば、奥の方なる林の中よ  
り若き女の稚兒を負ひたるが笹原の上を歩みて此方へ來  
るなり。極めてあでやかなる女にて、これも長き黒髪を垂れ  
たり。兒を結び付けたる紐は藤の蔓にて、著たる衣類は世の  
常の縞物なれど、裾のあたりぼろ／＼に破れたるを、色々の  
木の葉などを添へて綴りたり。足は地に著くとも覺えず。事  
も無げに此方に近より、男のすぐ前を通りて何方へか行き  
過ぎたり。此人は其折の怖ろしさより煩ひ始めて、久しく病  
みてありしが、近き頃亡せたり。

五 遠野郷より海岸の田ノ濱吉利吉里などへ越ゆるに  
は、昔より笛吹峠と云ふ山路あり。山口村より六角牛の方へ  
入り路のりも近かりしかど、近年此峠を越ゆる者、山中にて

○山口は六角牛に  
登る山口なれば村  
の名となれるなり

○標の前は標の森  
標の前は標の森  
標の前は標の森  
標の前は標の森  
標の前は標の森

必ず山男山女に出逢ふより、誰も皆怖ろしがりて次第に往來も稀になりしかば、終に別の路を境木峠と云ふ方に開き、和山を馬次場として今は此方ばかりを越ゆるやうになれり。二里以上の迂路なり。

六 遠野郷にては豪農のこゝを今でも長者と云ふ。青笹村大字標前の長者の娘、ふと物に取り隠されて年久しくなりしに、同じ村の何某と云ふ獵師、或日山に入りて一人の女に遭ふ。怖ろしくなりて之を撃たんとせしに、何をちでは無いか、ぶつなと云ふ。驚きてよく見れば、彼の長者がまな娘なり。何故にこんな處には居るぞと問へば、或物に取られて今は其妻となれり。子もあまた生みたれど、すべて夫が食ひ盡して一人此の如く在り。おのれは此地に一生涯を送ること

なるべし。人にも言ふな。御身も危ふければ疾く歸れと云ふまゝに、其在所をも問ひ明らかめずして遁げ還れりと云ふ。

七 上郷村の民家の娘、栗を拾ひに山に入りたるまゝ、歸り來らず。家の者は死したるならんと思ひ、女のしたる枕を形代として葬式を執行ひ、さて二三年を過ぎたり。然るに其村の者獵をして五葉山の腰のあたりに入りしに、大なる岩の蔽ひかゝりて岩窟のやうになれる所にて、鬪らす此女に逢ひたり。互に打驚き、如何にしてかゝる山には居るかと問へば、女の曰く、山に入りて恐ろしき人にさらはれ、こんな所に來たるなり。遁げて歸らんと思へど、些の隙も無しとのことなり。其人は如何なる人かと問ふに、自分には竝の人間と見ゆれど、たい丈極めて高く眼の色少し凄しと思はる。子共

○一市間は遠野の  
町の日の間なり  
市の日の間なり  
六度の市間なり  
市間は即ち五日の  
ことなり

も幾人か生みたれど、我に似ざれば我子には非すと云ひて  
食ふにや殺すにや、皆何れへか持去りてしまふ也と云ふま  
ことに我々と同じ人間かと押し返して問へば、衣類なども  
世の常なれど、たゞ眼の色少しちがへり。一市間に一度か三  
度、同じやうなる人四五人集り来て、何事か話を爲し、やがて  
何方へか出て行くなり、食物など外より持ち来るを見れば  
町へも出ることもならん。かく言ふ中にも、今にそこへ歸つて  
来るかも知れずと云ふ故獵師も怖ろしくなりて歸りたり  
と云へり、二十年ばかりも以前のことかと思はる。  
八 黄昏に女や子共の家の外に出て居る者はよく神隠  
しにあふことは他の國々と同じ、松崎村の寒戸と云ふ所の  
民家にて、若き娘梨の樹の下に草履を脱ぎ置きたるまゝ行

方を知らずなり、三十年あまり過ぎたりしに、或日親類知音  
の入々其家に集りてありし處へ、極めて老いさらばひて其  
女歸り來れり、如何にして歸つて來たかと問へば、人々に逢  
ひたかりし故歸りしなり、さらば又行かんとて、再び跡を留  
めず行き失せたり、其日は風の烈しく吹く日なりき、されば  
遠野郷の人は、今でも風の騒がしき日には、けふはサムの  
婆が歸つて來さうな日なりと云ふ。

九 菊池彌之助と云ふ老人は、若き頃賦賃を業とせり、笛  
の名人にて、夜通しに馬を追ひて行く時などは、よく笛を吹  
きながら行きたり、ある薄月夜に、あまたの仲間の者と共に  
濱へ越ゆる境木峠を行くとて、又笛を取出して吹きすすみ  
つゝ、大谷地と云ふ所の上を過ぎたり、大谷地は深き谷にて

○ヤチはアイヌ語  
にて、濕地の義なり

内地に多くある地名なり又ヤツともヤトともヤトとも云ふ

白樺の林しげく、其下は葎など生じ濡りたる澤なり。此時谷の底より何者か高き聲にて面白いぞーと呼はる者あり。一同悉く色を失ひ逃げ走りたりと云へり。

一〇 此男ある奥山に入り茸を採るとて小屋を掛け宿りてありしに、深夜に遠き處にてきやーと云ふ女の叫聲聞え胸を蕪かしたることあり。里へ歸りて見れば、其同じ夜時も同じ刻限に、自分の妹なる女その息子の爲に殺されてありき。

一一 此女と云ふは母一人子一人の家なりしに、嫁と姑との仲悪しくなり、嫁は屢親里へ行き居り來ざることあり。其日は嫁は家に在りて打臥して居りしに、晝の頃になり突然と作の言ふには、ガガはとて生しては置かれぬ、今日は

○ガガは方言にて母といふことなり

きつと殺すべしとて、大なる草刈鎌を取り出し、ごしごしと磨ぎ始めたり。その有様更に戲言とも見えざれば、母は様々に事を分けて詫びたれども少しも聴かず。嫁も起出で泣きながら諫めたれど、露從ふ色も無く、やがては母が遁れ出でんとする様子あるを見て、前後の戸口を悉く鎖したり。便用に行きたしと言へば、おのれ自ら外より便器を持ち來りて此へせよと云ふ。夕方にもなりしかば、母も終にあきらめて、大なる圍爐裡の側にうづくまり只泣きて居たり。悴はよく磨きたる大鎌を手にして近より來り、先づ左の肩口を目掛けて薙ぐやうにすれば、鎌の刃先爐の上の火棚に引掛かりてよく斬れず。其時に母は深山の奥にて彌之助が聞き付けしやうなる叫聲を立てたり。二度目には右の肩より

○惜むべし乙益は  
明治四十二年の夏  
の始になくなりた

切り下げたるが、此にても猶死絶えずしてある所へ里人等驚きて馳付け咎を取抑へ直に警察官を呼びて渡したり。警官がまだ棒を持ちてある時代のことなり。母親は男が捕へられ引き立てられて行くを見て、瀧のやうに血の流るゝ中より、おのれは恨も抱かずに死ぬるなれば、孫四郎は宥したまはれと言ふ。之を聞きて心を動かさぬ者は無かりき。孫四郎は途中にても其鎌を振上げて巡査を追ひ廻しなどせしが、狂人なりとて放免せられて家に歸り、今も生きて里に在り。

一二 土淵村山口に新田乙藏と云ふ老人あり。村の人は乙藏といふ。今は九十に近く病みて將に死んとす。年頃遠野郷の昔の話をよく知りて、誰かに話して聞かせ置きたしと口

癖のやうに言へど、あまり臭ければ立ち寄りて聞かんとする人なし。處々の館の主の傳記、家々の盛衰、昔より此郷に行はれし歌の數々を始めとして、深山の傳説又は其奥に住める人々の物語など、此老人最もよく知れり。

一三 此老人は數十年の間山の中に獨にて住みし人なり。よき家柄なれど、若き頃財産を傾け失ひてより、世の中に思を絶ち、峠の上に小屋を掛け、甘酒を往來の人に賣りて活計とす。駄賃の徒は此翁を父親のやうに思ひて親しみたり。少しく收入の餘あれば、町に下り來て酒を飲む。赤毛布にて作りたる半纏を著て、赤き頭巾を被り、酔へは町の中を躍りて歸るに巡査もどがめず。愈老衰して後、舊里に歸りあはれなる暮しを爲せり。子供はすべて北海道へ行き、翁唯一人也。

○オシラサマは雙  
神なりアイヌの中  
に此神あること  
異風俗葉聞に見

○羽後和野の町  
にて羽後神の正  
なる陰陽の神に  
月十五日白粉を  
之と似たる例なり

一四 部落には必ず一戸の舊家ありて、オクナイサマと云ふ神を祀る。其家をば大同と云ふ。此神の像は桑の木を削りて顔を描き、四角なる布の真中に穴を明け、之を上より通して衣裳とす。正月の十五日には、小字中の人々この家に集り來りて之を祭る。又オシラサマと云ふ神あり。此神の像も亦同じやうにして造り設け、これも正月の十五日に里人集りて之を祭る。其式には白粉を神像の顔に塗ることあり。大同の家には必ず壘一帖の室あり。此部屋にて夜寝る者はいつも不思議に遭ふ。枕を反すなどは常のことなり。或は誰かに抱起され、又は室より突き出さるゝこともあり。凡そ靜かに眠ることを許さぬなり。

一五 オクナイサマを祭れば幸多し。土淵村大字柏崎の長

者阿部氏村にては田圃の家と云ふ。此家にて或年田植の人手足らず。明日は空も惟しきに僅ばかりの田を植る。残すことかなどつぶやきてありしに、ふと何方よりとも無く丈低き小僧一人來りて、おのれも手傳ひ申さんと言ふに任せて働かせて置きしに、午飯時に飯を食はせんとて尋ねたれど見えず。やがて再び歸り來て終日代を掻きよく働きて呉れしかば、其日に植るはてたり。どこの人かは知らぬが、晩には來て物を食ひたまへと誘ひしが、日暮れて又其影見えず。家に歸りて見れば、椽側に小さき泥の足跡あまたありて、段々に坐敷に入り、オクナイサマの神棚の所に止りてありしかば、さてはと思ひて其扉を開き見れば、神像の腰より下は田の泥にまみれていませし由。

○ザシキワラシは  
坐敷敷衆なり此神  
の石神問答一  
六八頁にも記事あ  
り

一六 コンセサマを祭れる家も少なからず此神の神體は  
オコマサマとよく似たり。オコマサマの社は里に多くあり。  
石又は木にて男の物を作りて捧ぐる也。今は追々とその事  
少なくなれり。

一七 舊家にはザシキワラシと云ふ神の住みたまふ家少  
なからず。此神は多くは十二三ばかりの童兒なり。折々人に  
姿を見することあり。土淵村大字飯豊の今淵勘十郎と云ふ  
人の家にては、近き頃高等女學校に居る娘の休暇にて歸り  
てありしが、或日廊下にてはたとザシキワラシに行き逢ひ  
大に驚きしことあり。これは正しく男の兒なりき。同じ村山  
口なる佐々木氏にては、母人ひとり縫物して居りしに、次の  
間にて紙のがさくと云ふ音あり。此室は家の主人の部屋

にて、其時は東京に行き不在の折なれば、恠しと思ひて板戸  
を開き見るに何の影も無し。暫時の間坐りて居ればやがて  
又頻に鼻を鳴す音あり。さては坐敷ワラシなりけりと思へ  
り。此家にも坐敷ワラシ住めり。と云ふこと、久しき以前より  
の沙汰なりき。此神の宿りたまふ家は富貴自在なりと云ふ  
ことなり。

一八 ザシキワラシ又女の兒なることあり。同じ山口なる  
舊家にて山口孫左衛門と云ふ家には、童女の神二人いませ  
りと云ふことを久しく言傳へたりしが、或年同じ村の何某  
と云ふ男、町より歸るとて留場の橋のほとりにて見馴れざ  
る二人のよき娘に逢へり。物思はしき様子にて此方へ來る。  
お前たちはどこから來たと問へば、おら山口の孫左衛門が



處から來たと答ふ。此から何處へ行くのかと聞けば、その  
村の何某が家にと答ふ。その何某は稍離れたる村にて今も  
立派に暮せる豪農なり。さては孫左衛門が世も末だなど思  
ひしが、それより久しからずして、此家の主従二十幾人其の  
毒に中りて一日のうちに死に絶え、七歳の女の子一人を殘  
せしが、其女も亦年老いて子無く、近き頃病みて失せたり。

一九 孫左衛門が家にては、或日梨の木めぐりに見馴れ  
ぬ茸のあまた生えたるを食はんか食ふまじきかと男共の  
評議してあるを聞きて、最後の代の孫左衛門、食はぬがよし  
と制したれども、下男の一人が云ふには、如何なる茸にても  
水桶の中に入れて芋殻を以てよくかき廻して後食へば決  
して中ることなしとて、一同此言に従ひ家内悉く之を食ひ

たり。七歳の女の兒は其日外に出で、遊びに氣を取られ、茸  
飯を食ひに歸ることを忘れし爲に助かりたり。不意の主人  
の死去にて人々の動轉してある間に、遠き近き親類の人々、  
或は生前に貸ありと云ひ、或は約束ありと稱して、家の貨財  
は味噌の類までも取去りしかば、此村草分の長者なりしか  
ども、一朝にして跡方も無くなりたり。

二〇 此凶變の前には色々の前兆ありき。男ども苜置きた  
る秣を出すとて三ッ齒の鍬にて掻きまはせしに、大なる蛇  
を見出した。これも殺すなと主人が制せしをも聽かずし  
て打殺したりしに、其跡より秣の下にくらとも無き蛇あ  
りて、うごめき出でたるを、男ども面白半分面白半分に悉く之を殺し  
たり。さて取捨つべき所も無ければ、屋敷の外外に穴を掘りて

之を埋め蛇塚を作る。その蛇は實に何荷とも無くありたり  
といへり。

二一 右の孫左衛門は村には珍しき學者にて常に京都よ  
り和漢の書を取寄せて讀み耽りたり。少し變人と云ふ方な  
りき。狐と親しくなりて家を富ます術を得んと思ひ立ち先  
づ庭の中に稻荷の祠を建て、自身京に上りて正一位の神階  
を請けて歸り、それよりは日々一枚の油揚を缺かすことな  
く、手づから社頭に供へて拜を爲せしに、後には狐馴れて近  
づけども逃げず、手を延ばして其首を抑へなどしたりと云  
ふ。村に在りし藥師の堂守は、我が佛様は何物をも供へざれ  
ども、孫左衛門の神様よりは御利益ありと度々笑ひごこと  
したりと也。

二二 佐々木氏の曾祖母年よりて死去せし時、棺に取納め  
親族の者集り來て其夜は一同座敷にて寝たり。死者の娘に  
て亂心の爲離縁せられたる婦人も亦其中に在りき。喪の間  
は火の氣を絶やすことを思むが所の風なれば、祖母と母と  
の二人のみは、大なる圍爐裡の兩側に座り、母人は旁に炭籠  
を置き、折々炭を繼ぎてありしに、ふと裏口の方より足音し  
て來る者あるを見れば、亡くなりし老女なり。平生腰かゝみ  
て衣物の裾の引するを、三角に取上げて前に縫附けてあり  
しが、まざりとその通りにて、縞目にも見覚えあり。あなや  
と思ふ間も無く、二人の女の座れる爐の脇を通り行くこと、  
裾にて炭取にさはりしに、尤き炭取なればくるくるとまは  
りたり。母人は氣丈の人なれば、振り返りあそを見送りたれ

○大洞は洞と北  
知れず又は東  
に於て門あり  
いふことなり  
國志に例あり  
ラマへと云ふ  
に見ゆ

○大洞は洞と北  
知れず又は東  
に於て門あり  
いふことなり  
國志に例あり  
ラマへと云ふ  
に見ゆ

ば親類の人々の打臥したる座敷の方へ近より行くと思ふ程に、かの狂女のけたましき聲にて、おばあさんが来たこと叫びたり。其餘の人々は此聲に睡を覺し只打驚くばかりなりしと云へり。

二三 同じ人の二七日の對夜に、知音の者集りて夜更くるまで念佛を唱へ立歸らんとする時、門口の石に腰掛けてあちらを向ける老女あり、其うしろ付正しく亡くなりし人の通りなりき。此は數多の人見たる故に、誰も疑はず如何なる執著のありしにや、終に知る人はなかりし也。

二四 村々の舊家を大同と云ふは、大同元年に甲斐國より移り來たる家なればかく云ふことなり。大同は田村將軍征討の時代なり。甲斐は南部家の本國なり。二つの傳説を

混じたるには非ざるか。

二五 大同の祖先たちが始めて此地方に到着せしは、恰も歳の暮にて、春のいそぎの門松を、まだ片方はえ立てぬうちに早元日になりたればとて、今も此家々にては吉例として門松の片方を地に伏せたるまゝにて、標繩を引き渡することなり。

二六 柏崎の田圃のうちと稱する阿倍氏は殊に聞えたる舊家なり。此家の先代に彫刻に巧なる人ありて、遠野一郷の神佛の像には此人の作りたる者多し。

二七 早地峯より出で、東北の方宮古の海に流れ入る川を閉伊川と云ふ。其流域は即ち下閉伊郡なり。遠野の町の中に、今池の端と云ふ家の先代の主人宮古へ行きての歸

○此話に似たる物  
田西洋にもあり偶

るさ、此川の原臺の淵と云ふあたりを通りしに若き女ありて一封の手紙を托す。遠野の町の後なる物見山の中腹にある沼に行きて手を叩けば宛名の人出で来るべしとなり。此人請け合ひはしたれども路々心に掛りてとつおいつせしに、一人の六部に行き逢へり。此手紙を開きよみて曰く、此を持ち行かば汝の身に大なる災あるべし。書き換へて取らすべしとて更に別の手紙を與へたり。これを持ちて沼に行き敷の如く手を叩きしに、果して若き女出で、手紙を受け取り、其禮なりとて極めて小さき石臼を呉れたり。米を一粒入れて回せば下より黄金出づ。此寶物の力にてその家稍富有になりしに、妻なる者慾深くして、一度に澤山の米をつかみ入れしかば、石臼は頻に自ら回りて、終には朝毎に主人が此

合にヤ

石臼に供へたりし水の、小さき窪みの中に溜りてありし中へ滑り入りて見えすなりたり。その水溜りは後に小さき池になりて、今も家の旁に在り。家の名を池の端と云ふも其爲なりと云ふ。

二八 始めて早地峯に山路をつけたるは、附馬牛村の何某と云ふ獵師にて、時は遠野の南部家入部の後のことなり。其頃までは土地の者一人として此山には入りたる者無かりし也。この獵師半分ばかり道を開きて、山の半腹に假小屋を作りて居りし頃、或日爐の上に餅を並べ焼きながら食ひ居りしに、小屋の外を通る者ありて、頻に中を窺ふさまなり。よく見れば大なる坊主也。やがて小屋の中に入り來り、さも珍らしげに餅の焼くるを見てありしが、終にこらへ兼ねて手

○北上川の中古の  
大洪水に白雲水と  
いふがかり白雲水と  
姥が敷き餅に似た  
る焼石を食はせし  
崇なりと云ふ此話  
によく似たり

をさし延べて取りて食ふ。獵師も恐ろしければ自らも亦取りて與へしに嬉しげになほ食ひたり。餅皆になりたれば歸りぬ。次の日も又來るならんと思ひ、餅によく似たる白き石を二つ三つ、餅にまじへて爐の上に載せ置きしに、焼けて火のやうになれり。案の如くその坊主けふも來て、餅を取りて食ふこと昨日の如し。餅盡きて後其白石をも同じやうに口に入れたりしが、犬に驚きて小屋を飛び出し、姿見えすなれり。後に谷底にて此坊主の死してあるを見たりと云へり。

二九 雞頭山は早地峯の前面に立てる峻峯なり。麓の里にては又前藥師とも云ふ。天狗住めりとして、早地峯に登る者も決して此山は掛けず。山口のハチトと云ふ家の主人、佐々木氏の祖父と竹馬の友なり。極めて無法者にて、鉄にて草を刈

○下閉伊郡小國村  
大字小國

○地竹は深山に生  
する低き竹なり

り鎌にて土を掘るなど、若き時は亂暴の振舞のみ多かりし人なり。或時人と賭をして一人にて前藥師に登りたり。歸りての物語に曰く、頂上に大なる岩あり、其岩の上に大男三人居たり。前にあまたの金銀をひろげたり。此男の近よるを見て、氣色ばみて振り返る、その眼の光極めて恐ろし。早地峯に登りたるが途に迷ひて來たるなりと言へば、然らば送りて遣るべしとて先に立ち、麓近き處まで來り、眼を塞げと言ふまゝに、暫時そこに立ちて居る間に、忽ち異人は見えすなれりと言ふ。

三〇 小國村の何某と云ふ男、或日早地峯に竹を伐りに行きしに、地竹の夥しく茂りたる中に、大なる男一人寝て居たるを見たり。地竹にて編みたる三尺ばかりの草履を脱ぎて

○宛然として古風  
土記なよむが如し

あり仰に臥して大なる窟をかきてありき。

三一 遠野郷の民家の子女にして、異人にさらはれて行く者年々多くあり。殊に女に多しとなり。

三二 千晩ヶ嶽は山中に沼あり。此谷は物すごく腥き臭のする所にて、此山に入り歸りたる者はまことに少し。昔何の隼人と云ふ獵師あり。其子孫今もあり。白き鹿を見て之を追ひ此谷に千晩こもりたれば山の名とす。其白鹿撃たれて逃げ、次の山まで行きて片肢折れたり。其山を今片羽山と云ふ。さて又前なる山へ来て終に死したり。其地を死助と云ふ。死助權現とて祀れるはこの白鹿なりと云ふ。

三三 白望の山に行きて泊れば深夜にあたりの薄明るくなることあり。秋の頃茸を採りに行き山中に宿する者よく

此事に逢ふ。又谷のあなたにて大木を伐り倒す音、歌の聲など聞ゆることあり。此山の大きさは測るべからず。五月に萱を刈りに行くとき、遠く望めば桐の花の咲き満ちたる山あり。恰も紫の雲のたなびけるが如し。されども終に其あたりに近づくこと能はず。曾て茸を採りに入りし者あり。白望の山奥にて金の榎と金の杓とを見たり。持ち歸らんとするに極めて重く、鎌にて片端を削り取らんとしたれど、それもかなはず。又來んと思ひて樹の皮を白くし、柔としたりしが、次の日人々と共に行きて之を求めたれど、終に其木のありかをも見出し得ずしてやみたり。

三四 白望の山續きに離森と云ふ所あり。その小字に長者屋敷と云ふは、全く無人の境なり。茲に行きて炭を焼く者あ

りき。或夜その小屋の垂菰シロモをかゝげて内を覗ウカふ者を見たり。髪を長く二つに分けて垂れたる女なり。此あたりにてても深夜に女の叫聲を聞くことは珍しからず。

三五 佐々木氏の祖父の弟白望シロノゾミに茸を採りに行きて宿りし夜谷を隔てたるあなたの大なる森林の前を横ざりて女の走り行くを見たり。中空を走るやうに思はれたり。待てちやアと二聲ばかり呼はりたるを聞けりぞぞ。

三六 猿の經立御犬イヌの經立は恐ろしきものなり。御犬とは狼のことなり。山口の村に近き二ツ石山フツツイシヤマは岩山なり。ある雨の日、小學校より歸る子ども此山を見るに、處々の岩の上に御犬うづくまりてあり。やがて首を下より押上ぐるやうにしてかはるゝ吠えたり。正面より見れば生れ立ての馬の

子ほどに見ゆ。後ウシロから見れば存外ソノトウ小さしと云へり。御犬のうなる聲ほど物凄く恐ろしきものは無し。

三七 境木峠サカイノツツと和山峠ワヤマツツとの間に昔は駄賃馬を追オふ者シヤシヤ屢シバシバ狼に逢ひたりき。馬方等は夜行には大抵十人ばかりも群シラを爲し、その一人が牽く馬は一端網ヒトハとて大抵五六七匹ヒキまでなれば、常に四五十匹の馬の數なり。ある時二三百ばかりの狼追ひ來り、其足音山もどよむばかりなれば、あまりの恐ろしさに馬も人も一所に集まりて、其めぐりに火を燒きて之を防ぎたり。されど猶其火を躍り越えて入り來るにより、終には馬の綱ツナを解トき之を張り回マらせしに、罪ナなどなりとや思ひけん、それより後は中に飛び入らず、遠くより取圍とりかこみて夜の明るまで吠えてありきぞぞ。

三八 小友村の舊家の主人にて今も生存せる某爺と云ふ人町より歸りに頻に御犬の吠ゆるを聞きて酒に酔ひたればおのれも亦其聲をまねたりしに狼も吠えながら跡より来るやうなり恐ろしくなりて急ぎ家に歸り入り門の戸を堅く鎖して打潜みたれども夜通し狼の家をめぐりて吠ゆる聲やまず夜明けて見れば馬屋の土臺の下を掘り穿ちて中に入り馬の七頭ありしを悉く食ひ殺してゐたり此家はその頃より産稍傾きたりとのことなり

三九 佐々木君幼き頃祖父と二人にて山より歸りしに村に近き谷川の岸の上に大なる鹿の倒れてあるを見たり横腹は破れ殺されて間も無きにやそこよりはまだ湯氣立てり祖父の曰くこれは狼が食ひたるなり此皮ほしけれども

御犬は必ずどこか此近所に隠れて見てをるに相違なければ取るこゝが出来ぬと云へり

四〇 草の長さ三寸あれば狼は身を隠すと云へり草木の色に移り行くにつれて狼の毛の色も季節ごとに變りて行くものなり

四一 和野の佐々木嘉兵衛或年境木越の大谷地へ狩にゆきたり死助の方より走れる原なり秋の暮のことにて木の葉は散り盡し山もあらは也向の峯より何百とも知れぬ狼此方へ群れて走り來るを見て恐ろしさに堪へず樹の梢に上りてありしに其樹の下を夥しき足音して走り過ぎ北の方へ行けりその頃より遠野郷には狼甚だ少なくなれりとのことなり



○ワツホロは上羽  
織のことなり

四二 六角牛山の麓にヲバヤ板小屋など云ふ所あり。廣き  
萱山なり。村々より刈りに行く。ある年の秋飯豊村の者ども  
萱を刈るごと、岩穴の中より狼の子三匹を見出し、その二つ  
を殺し一つを持ち歸りしに、その日より狼の飯豊衆の馬を  
襲ふことやまず。外の村々の人馬には聊かも害を爲さず。飯  
豊衆相談して狼狩を爲す。其中には相撲を取り平生力自慢  
の者あり。さて野に出で、見るに雄の狼は遠くにをりて來  
らず。雌狼一つ鐵と云ふ男に飛び掛りたるを、ワツホロを脱  
ぎて腕に巻き、矢庭に其狼の口の中に突込みしに、狼之を噛  
む。猶強く突き入れながら人を喚ぶに、誰も々々怖れて近よ  
らず。其間に鐵の腕は狼の腹まで入り、狼は苦しまされに鐵  
の腕骨を噛み碎きたり。狼は其場にて死したれども、鐵も擔

がれて歸り程なく死したり。

四三 一昨年の遠野新聞にも此記事を載せたり。上郷村の  
熊と云ふ男、友人と共に雪の日に六角牛に狩に行き谷深く  
入りしに、熊の足跡を見出でたれば、手分して其跡を覓め、自  
分は峯の方を行きしに、とある岩の陰より大なる熊此方を見  
る。矢頃あまりに近かりしかば、銃をすて、熊に抱へ付き  
雪の上を轉びて谷へ下る。連の男之を救はんと思へども力  
及ばず、やがて谷川に落入りて、人の熊下になり水に沈みた  
りしかば、その隙に獸の熊を打取りぬ。水にも溺れず、爪の傷  
は數ヶ所受けたれども命に障ることほなかりき。

四四 六角牛の峯續きにて、橋野と云ふ村の上なる山に金  
坑あり。この鑛山の爲に炭を焼きて生計とする者、これも笛

○上閉伊郡栗橋村  
大字橋野

の上手にて、ある日晝の間小屋に居り、仰向に寝轉びて笛を吹きてありしに、小屋の口なる垂菰をかゝぐる者あり、驚きて見れば猿の經立なり、恐ろしくて起き直りたれば、おもむろに彼方へ去り行きぬ。

**四五** 猿の經立はよく人に似て、女色を好み里の婦人を盗み去ること多し、松脂を毛に塗り砂を其上に附けてをる故、毛皮は錠の如く鐵砲の弾も通らず。

**四六** 枋内村の林崎に住む何某と云ふ男、今は五十に近し、十年あまり前のことなり、六角牛山に鹿を撃ちに行き、オキを吹きたりしに、猿の經立あり、之を眞の鹿なりと思ひしか、地竹を手にて分けながら、大なる口をあけ嶺の方より下り來れり、臍潰れて笛を吹止めたれば、おがて反れて谷の方へ

○オキとは鹿笛のことなり

走り行きたり。

**四七** 此地方にて子供をおどす語に、六角牛の猿の經立が來るぞと云ふこと常の事なり、此山には猿多し、緒持の瀧を見に行けば、崖の樹の梢にあまた居り、人を見れば遁げながら木の實などを擲ちて行くなり。

**四八** 仙人峠にもあまた猿をりて行人に戯れ石を打ち付けなどす。

**四九** 仙人峠は登り十五里降り十五里あり、其中程に仙人の像を祀りたる堂あり、此堂の壁には旅人がこの山中にて遭ひたる不思議の出來事を書き識すこと昔よりの習なり、例へば、我は越後の者なるが、何月何日の夜、この山路にて若き女の髪を垂れたるに逢へり、こちらを見てにこと笑ひた

○この一里し小道なり

りと云ふ類なり、又此所にて猿に悪戯をせられたりとか、三人の盜賊に逢へりと云ふやうなる事をも記せり。

五〇 死助の山にカツコ花あり、遠野郷にても珍しと云ふ花なり、五月閑古鳥の啼く頃、女や子ども之を探りに山へ行く、酔の中に漬けて置けば紫色になる、酸漿の實のやうに吹きて遊ぶなり、此花を探ることは若き者の最も大なる遊樂なり。

五一 山には様々の鳥住めど、最も寂しき聲の鳥はオット鳥なり、夏の夜中に啼く、濱の大槌より駄賃附の者など峠を越え來れば、遙に谷底にて其聲を聞くと云へり、昔ある長者の娘あり、又ある長者の男の子と親しみ、山に行きて遊びしに、男見えすなりたり、夕暮になり夜になるまで探しあるき

○クツゴコは馬の口に嵌める網の袋なり

しが、之を見つくることを得ずして、終に此鳥になりたりと云ふ、オットトン、オットトンと云ふは夫のことなり、末の方かすれてあはれなる鳴聲なり、

五二 馬追鳥は時鳥に似て少し大きく、羽の色は赤に茶を帯び、肩には馬の網のやうなる縞あり、胸のあたりにクツゴコのやうなるかたあり、これも或長者が家の奉公人、山へ馬を放しに行き、家に歸らんとするに一匹不足せり、夜通し之を求めあるきしが、終に此鳥となる、アーホー、アーホーと啼くは此地方にて野に居る馬を追ふ聲なり、年により馬追鳥里に來て啼くことあるは飢饉の前兆なり、深山には常に住みて啼く聲を聞くなり、

五三 郭公と時鳥とは昔有りし姉妹なり、郭公は姉なるが

○この字は馬鈴薯のことなり

ある時芋を掘りて焼き、そのまはりの堅き所を自ら食ひ、中の軟かなる所を妹に與へたりしを、妹は姉の食ふ分は一層旨かるべしと想ひて、庖丁にて其姉を殺せしに、忽ちに鳥となり、ガンコ、ガンコと啼きて飛び去りぬ。ガンコは方言にて堅い所と云ふことなり。妹さてはよき所をのみおのれに呉れしなりけりと思ひ、悔恨に堪へず、やがて又これも鳥になりて庖丁かけたと啼きたりと云ふ。遠野にては時鳥のことを庖丁かけと呼ぶ。盛岡邊にては時鳥はどちやへ飛んでたと啼くと云ふ。

五四 閉伊川の流には淵多く恐ろしき傳説少なからず。小國川との落合に近き所に、川井と云ふ村あり。其村の長者の奉公人、ある淵の上なる山にて樹を伐るごと、斧を水中に取

○下閉伊郡川井村  
大字川井、川井は  
勿論川合の義なるべし

落したり。主人の物なれば淵に入りて之を探りしに、水の底に入るまゝに物音聞ゆ。之を求めて行くに岩の陰に家あり。奥の方に美しき娘機を織りて居たり。そのハタシに彼の斧は立てかけてありたり。之を返したまはらんと言ふ時、振り返りたる女の顔を見れば、二三年前に身まかりたる我が主人の娘なり。斧は返すべければ、我が此所にあることを人と言ふな。其禮としては其方身上良くなり、奉公をせずともすむやうにして遣らんと言ひたり。その爲なるか否かは知らず。其後胴引など云ふ博奕に不思議に勝ち續けて金溜り程なく奉公をやめ家に引込みて中位の農民になりたれど、此男は疾くに物忘れして、此娘の言ひしことも心付かずしてありしに、或日同じ淵の邊を過ぎて町へ行くごと、ふと前の

事を思ひ出し、伴へる者に以前かゝることありきと語りしかば、やがて其噂は近郷に傳はりぬ。其頃より男は家産再び傾き、又昔の主人に奉公して年を経たり。家の主人は何と思ひしにや、その淵に何荷とも無く熱湯を注ぎ入れなどしたりしが、何の效も無かりしことなり。

五五 川には河童多く住めり。猿ヶ石川殊に多し。松崎村の川端の家にて、二代まで續けて河童の子を孕みたる者あり。生れし子は斬り刻みて一升樽に入れ、土中に埋めたり。其形極めて醜恠なるものなりき。女の聲の里は新張村の何某とて、これも川端の家なり。其主人人に其始終を語り、かの家の者一同ある日島に行きて夕方に歸らんとするに、女川の汀に踞りてにこゝと笑ひてあり。次の日は晝の休に亦此

事あり。斯くすること日を重ねたりしに、次第に其女の所へ村の何某と云ふ者夜々通ふと云ふ噂立ちたり。始には聲が濱の方へ駄賃附に行きたる留守をのみ窺ひたりしが、後には聲と寝たる夜さへ來るやうになれり。河童なるべしと云ふ評判段々高くなりたれば、一族の者集りて之を守れども何の甲斐も無く、聲の母も行き、娘の側に寝たりしに、深夜にその娘の笑ふ聲を聞きて、さては來てありと知りながら身動きもかなはず。人々如何にもすべきやうなかりき。其産は極めて難産なりしが、或者の言ふには馬槽に水をたへ其中にて産まば安く産まるべしとのことにて、之を試みたれば果して其通りなりき。その子は手に水掻あり。此娘の母も亦曾て河童の子を産みしことありと云ふ。二代や三代

○道ちがへは道の  
二つに別る、所即  
ち道分なり

の因縁には非ずと言ふ者もあり此家も如法の豪家にて○  
○○○○と云ふ士族なり村會議員をしたることもあり  
五六 上郷村の何某の家にて河童らしき物の子を産み  
たることあり確なる證とては無けれど身内真赤にして口  
大きくまことにいやな子なり忌はしければ棄てんとて  
之を携へて道ちがへに持ち行きそこに置き一問ばかり  
も離れたりしがふと思ひ直し惜しきものなり賣りて見せ  
物にせば金になるべきにとて立歸りたるに早取り隠され  
て見えざりきと云ふ  
五七 川の岸の砂の上には河童の足跡と云ふものを見る  
こと決して珍らしからず雨の日の翌日などは殊に此事あ  
り猿の足と同じく親指は離れて人間の手の跡に似たり長

さは三寸に足らず指先のあとは人のやうに明かには見  
えずと云ふ

五八 小島瀬川の姥子淵の邊に新屋の家と云ふ家ありあ  
る日淵へ馬を冷しに行き馬曳の子は外へ遊びに行きし間  
に河童出で、其馬を引込まんとし却りて馬に引きすられ  
て厩の前に來り馬槽に覆はれてありき家の者馬槽の伏せ  
てあるを惟しみて少しあけて見れば河童の手出でたり村  
中の者集りて殺さんか宥さんかと評議せしが結局今後は  
村中の馬に悪戯をせぬと云ふ堅き約束をさせて之を放し  
たり其河童今は村を去りて相澤の瀧の淵に住めりと云ふ  
五九 外の國にては河童の顔は青しと云ふやうなれど遠  
野の河童は面の色赭きなり佐々木氏の曾祖母稱かりし頃

○此話などは類  
全圖に充満せり荷  
いふ國には必ず此  
話あり何の故にか

友だちと庭にて遊びてありしに、三本ばかりある胡桃の木の間より、眞赤なる顔したる男の子の顔見えたり。これは河童なりしとなり。今もその胡桃大木にて在り。此家の屋敷のめぐりはすべて胡桃の樹なり。

六〇 和野村の嘉兵衛爺、雉子小屋に入りて雉子を待ちしに、狐屢出で、雉子を追ふ。あまり悪ければ之を撃たんと思ひ狙ひたるに、狐は此方を向きて何とも無げなる顔してあり。さて引金を引きたれども、火移らず。胸騒ぎして銃を検せしに、筒口より手元の處までいつの間にか悉く土をつめてありたり。

六一 同じ人六角牛に入りて白き鹿に逢へり。白鹿は神なりと云ふ言傳へあれば、若し傷けて殺すこと能はずば、必ず

祟あるべしと思案せしが、名譽の獵人なれば世間の嘲りをいとひ、思ひ切りて之を撃つに、手應へはあれども鹿少しも動かず。此時もちかく胸騒ぎして、平生魔除けとして危急の時の爲に用意したる黄金の丸を取出し、これに蓬を巻き附けて打ち放したれど、鹿は猶動かず。あまり恠しければ近よりに見るに、よく鹿の形に似たる白き石なり。數十年の間山中に暮せる者が、石と鹿とを見誤るべくも非ず。全く魔除の仕業なりけりと、此時ばかりは獵を止めばやと思ひたり。きと云ふ。

六二 又同じ人、ある夜山中にて小屋を作るいとま無くて、ごある大木の下に寄り、魔除けのサンヅ繩をおのれと木とのめぐりに三圍引きめぐらし、鐵砲を堅に抱へてまどろみ





ツは其穀物を容る  
る箱なり大小種々  
のキツあり

○上閉伊郡金澤村

より、いつ迄<sup>ツ</sup>経ちてもケセ子盡きず、家の者も之を恠しみて  
女に問ひたる<sup>ツ</sup>とき、始めて川より拾ひ上げし由をば語りぬ。  
此家はこれより幸運に向ひ、終に今の三浦家と成れり。遠野  
にては山中の不思議なる家をマヨヒガと云ふ。マヨヒガに  
行き當りたる者は、必ず其家の内の什器家畜何にてもあれ  
持ち出で、來べきものなり。其人に授<sup>ツ</sup>けんが爲にかゝる家  
をば見する也。女が無慾にて何物をも盗み來ざりしが故に、  
この椀自ら流れて來たりしなるべしと云へり。  
六四 金澤村は白望<sup>ツ</sup>の麓、上閉伊郡の内にて、殊に山奥に  
て、人の往來する者少なし。六七年前此村より栃内村の山崎  
なる某<sup>ツ</sup>かゝが家に娘の髻を取りたり。此髻實家に行かんと  
して山路に迷ひ、又このマヨヒガに行き當りぬ。家の有様、牛

五〇

五一

馬鶏の多きこと、花の紅白に咲きたりしことなど、すべて前  
の話の通りなり。同じく玄關に入りしに、膳椀を取出したる  
室あり。座敷に鐵瓶の湯たぎりて、今まさに茶を煮んとする  
所のやうに見え、どこか便所などのあたりに人が立ちて在  
るやうにも思はれたり。茫然として後には段々恐ろしくな  
り、引返して終に小國<sup>ツ</sup>の村里に出でたり。小國にては此話を  
聞きて實<sup>ツ</sup>とする者も無かりしが、山崎の方にてはそはマヨ  
ヒガなるべし。行きて膳椀の類を持ち來り長者にならんと  
て、髻殿を先に立て、人あまた之を求めに山の奥に入り、こ  
ゝに門ありきと云ふ處に來たれども、眼にかゝるものも無  
く空しく歸り來りぬ。その髻も終に金持になりたりと云ふ  
ことを聞かず。

六五 早地峯は御影石の山なり。此山の小國に向きたる側に阿倍ヶ城と云ふ岩あり。険しき崖の中程にありて、人などはとても行き得べき處に非ず。こゝには今でも阿倍貞任の母住めりと言傳ふ。雨の降るべき夕方など、岩屋の扉を鎖す音聞ゆと云ふ。小國附馬牛の人々は、阿倍ヶ城の錠の音がする。明日は雨ならんなど云ふ。

六六 同じ山の附馬牛よりの登り口にも亦阿倍屋敷と云ふ巖窟あり。兎に角早地峯は阿倍貞任にゆかりある山なり。小國より登る山口にも八幡太郎の家來の討死したるを埋めたりと云ふ塚三つばかりあり。

六七 阿倍貞任に關する傳説は此外にも多し。土淵村と昔は橋野と云ひし栗橋村との境にて、山口よりは二三里も登

りたる山中に、廣く平なる原あり。其あたりの地名に貞任と云ふ所あり。沼ありて貞任が馬を冷せし所なりと云ふ。貞任が陣屋を構へし址とも言ひ傳ふ。景色よき所にて東海岸よく見ゆ。

六八 土淵村には阿倍氏と云ふ家ありて貞任が末なりと云ふ。昔は榮えたる家なり。今も屋敷の周圍には堀ありて水を通ず。刀劍馬具あまたあり。當主は阿倍與右衛門。今も村にては二三等の物持にて、村會議員なり。阿倍の子孫は此外にも多し。盛岡の阿倍館の附近にもあり。厨川の棚に近き家なり。土淵村の阿倍家の四五町北、小鳥瀬川の河隈に館の址あり。八幡澤の館と云ふ。八幡太郎が陣屋と云ふもの是なり。これより遠野の町への路には又八幡山と云ふ山ありて、其山

○ニタカヒはアイ  
又語のニタト即ち  
温地より出なる  
べし地形よく合へ  
り四の國々にては  
ニタとも又タとし  
いふ皆これなり下  
閉伊郡小川村にし  
二田貝といふ字あ  
り

の八幡澤の館の方に向へる峯にも亦一つの館址あり。貞任  
が陣屋なりと云ふ。二つの館の間二十餘町を隔つ。矢戦をし  
たりと云ふ言傳へありて、矢の根を多く掘り出せしことあ  
り。此間に似田貝と云ふ部落あり。戦の當時此あたりは蘆し  
げりて土固まらず、ユキ／＼と動搖せり。或時八幡太郎こゝ  
を通りしに、敵味方何れの兵糧にや、粥を多く置きてあるを  
見て、これは煮た粥かと云ひしより村の名となる。似田貝の  
村の外を流るゝ小川を鳴川と云ふ。之を隔てゝ足洗川村あ  
り。鳴川にて義家が足を洗ひしより村の名となる。と云ふ。  
六九 今の土洲村には大同と云ふ家二軒あり。山口の大同  
は當主を大洞萬之丞と云ふ。此人の養母名はおひで、八十を  
超えて今も達者なり。佐々木氏の祖母の姉なり。魔法に長じ

たり、まじなひにて蛇を殺し、木に止れる鳥を落しなどする  
を佐々木君はよく見せてもらひたり。昨年の舊曆正月十五  
日に、此老女の語りしには、昔ある處に貧しき百姓あり。妻は  
無くて美しき娘あり。又一匹の馬を養ふ。娘此馬を愛して夜  
になれば厩舎に行きて寝ね、終に馬と夫婦に成れり。或夜父  
は此事を知りて、其次の日に娘には知らせず、馬を連れ出し  
て桑の木につり下げて殺したり。その夜娘は馬の居らぬよ  
り父に尋ねて此事を知り、驚き悲しみて桑の木の下に行き、  
死したる馬の首に縋りて泣きゐたりしを、父は之を惡みて  
斧を以て後より馬の首を切り落せしに、忽ち娘は其首に乗  
りたるまゝ、天に昇り去れり。オシラサマと云ふは此時より  
成りたる神なり。馬をつり下げたる桑の枝にて其神の像を

作る、其像三つありき。本にて作りしは山口の大同にあり。之を姉神とす。中にて作りしは山崎の在家權十郎と云ふ人の家に在り。佐々木氏の伯母が縁付きたる家なるが、今は家絶えて神の行方を知らず。末にて作りし妹神の像は今附馬牛村に在りと云へり。

七〇 同じ人の話に、オクナイサマはオシラサマの在る家には必ず伴ひて在す神なり。されどオシラサマはなくてオクナイサマのみ在る家もあり。又家によりて神の像も同じからず。山口の大同に在るオクナイサマは木像なり。山口の三石たにえと云ふ人の家なるは掛軸なり。田圃のうちにいませるは亦木像なり。飯豊の大同にもオシラサマは無けれどオクナイサマのみはいませりと云ふ。

七一 此話をしたる老女は熱心なる念佛者なれど、世の常の念佛者とは様かはり、一種邪宗らしき信仰あり。信者に道を傳ふることはあれども、互に嚴重なる秘密を守り、其作法に就きては親にも子にも聊かたりとも知らしめず。又寺とも僧とも少しも関係はなくて、在家の者のみの集りなり。其人の數も多からず。三石たにえと云ふ婦人などは同じ仲間なり。阿彌陀佛の齋日には、夜中人の靜まるを待ちて會合し、隠れたる室にて祈禱す。魔法まじなひを善くする故に、郷黨に對して一種の權威あり。

七二 栃内村の字琴畑は深山の澤に在り。家の數は五軒ばかり。小鳥瀬川の支流の水上市なり。此より栃内の民居まで二里を隔つ。琴畑の入口に塚あり。塚の上には木の座像あり。お

○遊神好佛子共  
 止す外を怒り多し  
 遠江小笠原郡大井村  
 東光寺の神樂師  
 倍田村の神樂師  
 軍田村の神樂師  
 筑前守の神樂師  
 勝堂の神樂師  
 勝堂の神樂師

よそ人の大きさにて、以前は堂の中に在りしが、今は雨ざらし也。之をカクラサマと云ふ。村の子供之を玩物にし、引き出して川へ投げ入れ又路上を引きすりなどする故に、今は鼻も口も見えぬやうになれり。或は子供を叱り戒めて之を制止する者あれば、却りて祟を受け病むことありと云へり。

**七三** カクラサマの木像は遠野郷のうちに數多あり。枋内の字西内にもあり。山口分の大洞と云ふ所にもありしことを記憶する者あり。カクラサマは人の之を信仰する者なし。粗末なる彫刻にて、衣裳頭の飾の有様も不分明なり。

**七四** 枋内のカクラサマは右の大小二つなり。土淵一村にては三つか四つあり。何れのカクラサマも木の半身像にて、なだの荒削りの無格好なるもの也。されど人の顔なりと云

ふことだけは分るなり。カクラサマとは以前は神々の旅をして休息したまふべき場所の名なりしが、其地に常います神をかく唱ふることゝなれり。

**七五** 離森の長者屋敷にはこの數年前まで燐寸の軸木の工場ありたり。其小屋の戸口に夜になれば女の伺ひ寄りて人を見てげたぐと笑ふ者ありて、淋しさに堪へざる故、終に工場を大字山口に移したり。其後又同じ山中に枕木伐出の爲に小屋を掛けたる者ありしが、夕方になると人夫の者何れへか迷ひ行き、歸りて後茫然としてあること屢なり。かかる人夫四五人もありて、其後も絶えず何方へか出で、行くことありき。此者どもが後に言ふを聞けば、女が來て何處へか連れ出すなり。歸りて後は二日も三日も物を覺えずと

○昔國のモカ塚ス  
クモ塚には多くは  
之と同じき長者傳  
説を伴へり又黄金  
埋蔵の傳説も昔國  
に限らず多くあり

云へり。

七六 長者屋敷は昔時長者の住みたりし址なりとて其あ  
たりにも糠森と云ふ山あり長者の家の糠を捨てたるが成  
れるなりと云ふ此山中には五つ葉のうつ木ありて其下に  
黄金を埋めてありとて今も其うつぎの有處を求めあるく  
者稀々にありこの長者は昔の金山師なりしならんが此あ  
たりには鐵を吹きたる滓あり恩徳の金山もこれより山嶺  
きにて遠からず。

七七 山口の田尻長三郎と云ふは土淵村一番の物持なり。  
當主なる老人の話に此人四十あまりの頃おひで老人の息  
子亡くなりて葬式の夜人々念佛を終り各歸り行きし跡に  
自分のみは話好なれば少しあどになりて立ち出でしに軒

の雨落の石を枕にして仰臥したる男ありよく見れば見も  
知らぬ人にて死してあるやうなり月のある夜なれば其光  
にて見るに膝を立て口を開きてあり此人大膽者にて足に  
て揺かして見たれど少しも身じろぎせず道を防げて外に  
せん方も無ければ終に之を跨ぎて家に歸りたり次の朝行  
きて見れば勿論其跡方も無く又誰も外に之を見たりと云  
ふ人は無かりしかどその枕にしてありし石の形と在どこ  
ろとは昨夜の見覚えの通りなり此人の曰く手を掛けて見  
たらばよかりしに半ば恐ろしければ唯足にて觸れたるの  
みなりし故更に何物のわざとも思ひ付かずと。  
七八 同じ人の話に家に奉公せし山口の長藏なる者今も  
七十餘の老翁にて生存す曾て夜遊びに出で、遅くかへり

來たりしに、主人の家の門は大槌往還に向ひて立てるが、この門の前にて濱の方より來る人に逢へり。雪合羽を著たり、近づきて立ちとまる故、長藏も恠しみて之を見たるに、往還を隔て、向側なる畠地の方へすつと反れて行きたり。かしこには垣根ありし筈なるにと思ひて、よく見れば垣根は正しくあり、急に怖ろしくなりて家の内に飛び込み、主人にこの事を語りしが、後になりて聞けば、此と同じ時刻に新張村の何某と云ふ者、濱よりの歸り途に馬より落ちて死したりとのことなり。

七九 この長藏の父をも亦長藏と云ふ代々田尻家の奉公人にて、その妻と共に仕へてありき。若き頃夜遊びに出で、まだ宵のうちに歸り來り門の口より入りしに、洞前に立てる

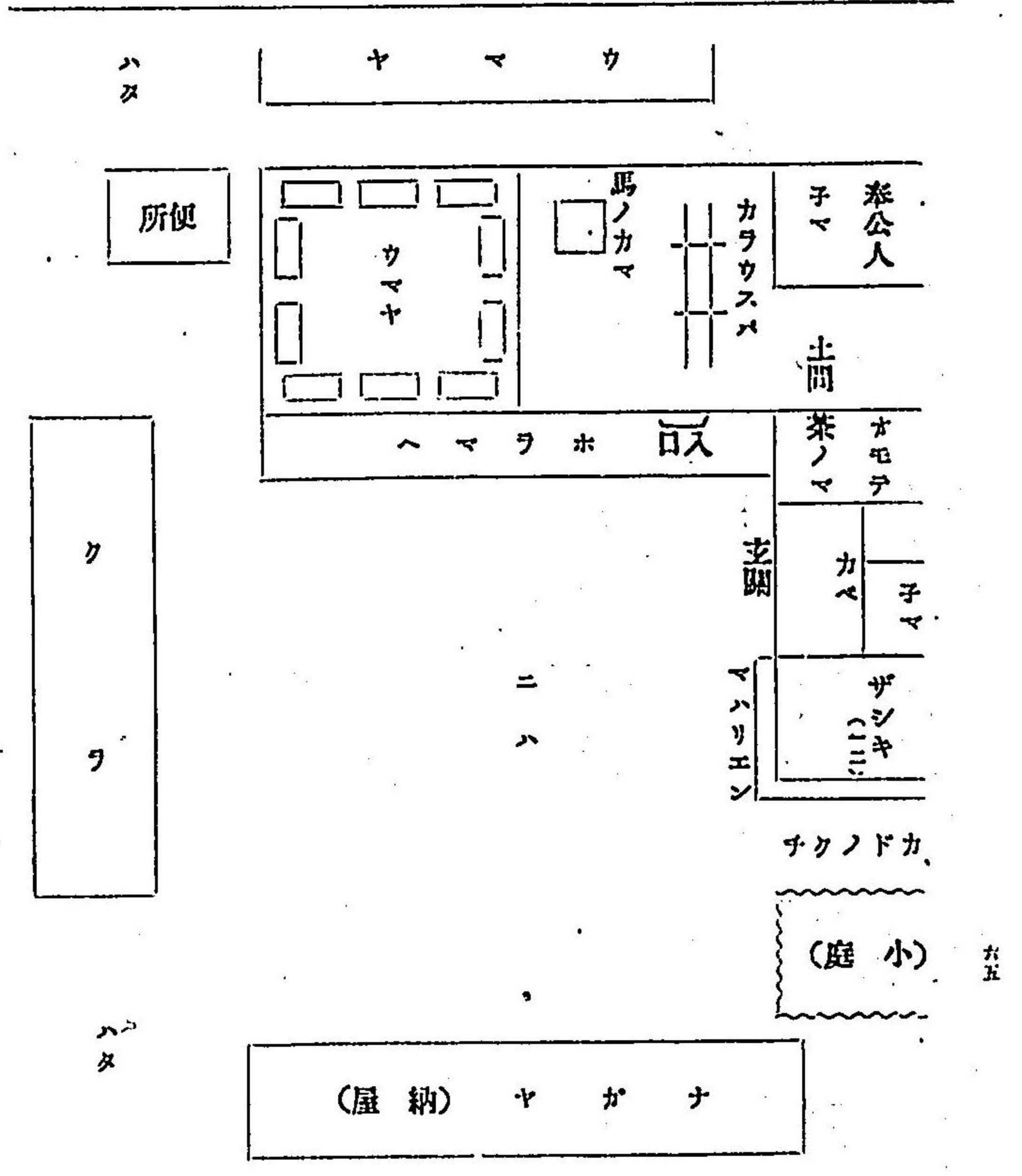
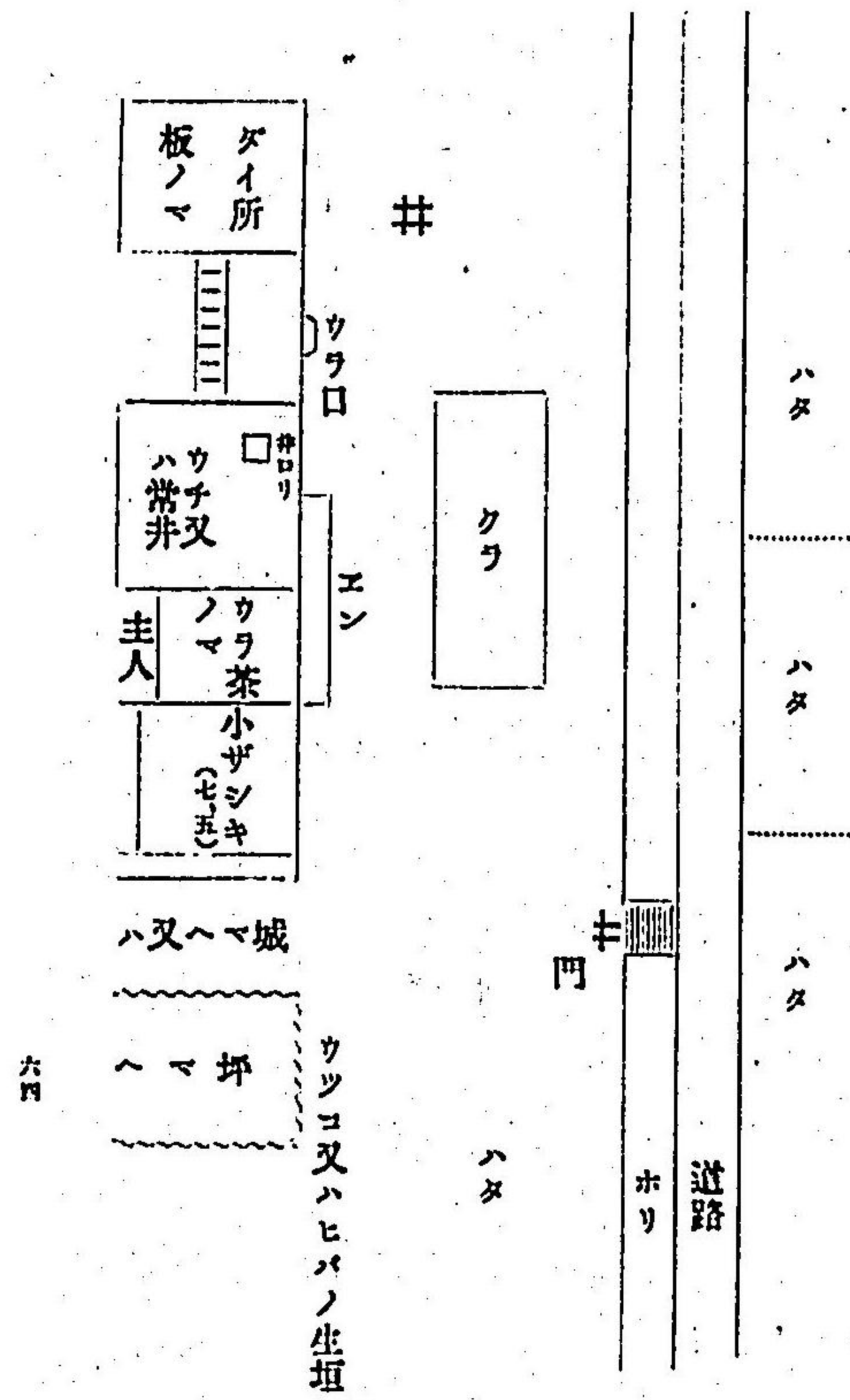
○ヨバヒトは呼ば  
人なるべし女に  
思ふ運ぶ人をかく

○雲壁はなげしの  
外側の壁なり

人影あり、懐手をして筒袖の袖口を垂れ顔は茫としてよく見えす。妻は名をおつねと云へり、おつねの所へ來たるヨバヒトでは無いかと思ひ、つか／＼と近よりしに、裏の方へは逃げずして、却つて右手の玄關の方へ寄る故、人を馬鹿にするなど腹立たしくなりて、猶進みたるに、懐手のまゝ後ずさりして玄關の戸の三寸ばかり明きたる所より、すつと内に入りたり。されど長藏は猶不思議とも思はず、其戸の隙に手を差入れて中を探らんとせしに、中の隙子は正しく閉してあり。茲に始めて恐ろしくなり、少し引下らんとして上を見れば、今の男玄關の雲壁にひたと附きて我を見下す如く、其首は低く垂れて我頭に觸るゝばかりにて、其眼の球は尺餘も抜け出で、あるやうに思はれたりと云ふ。此時は只恐ろ

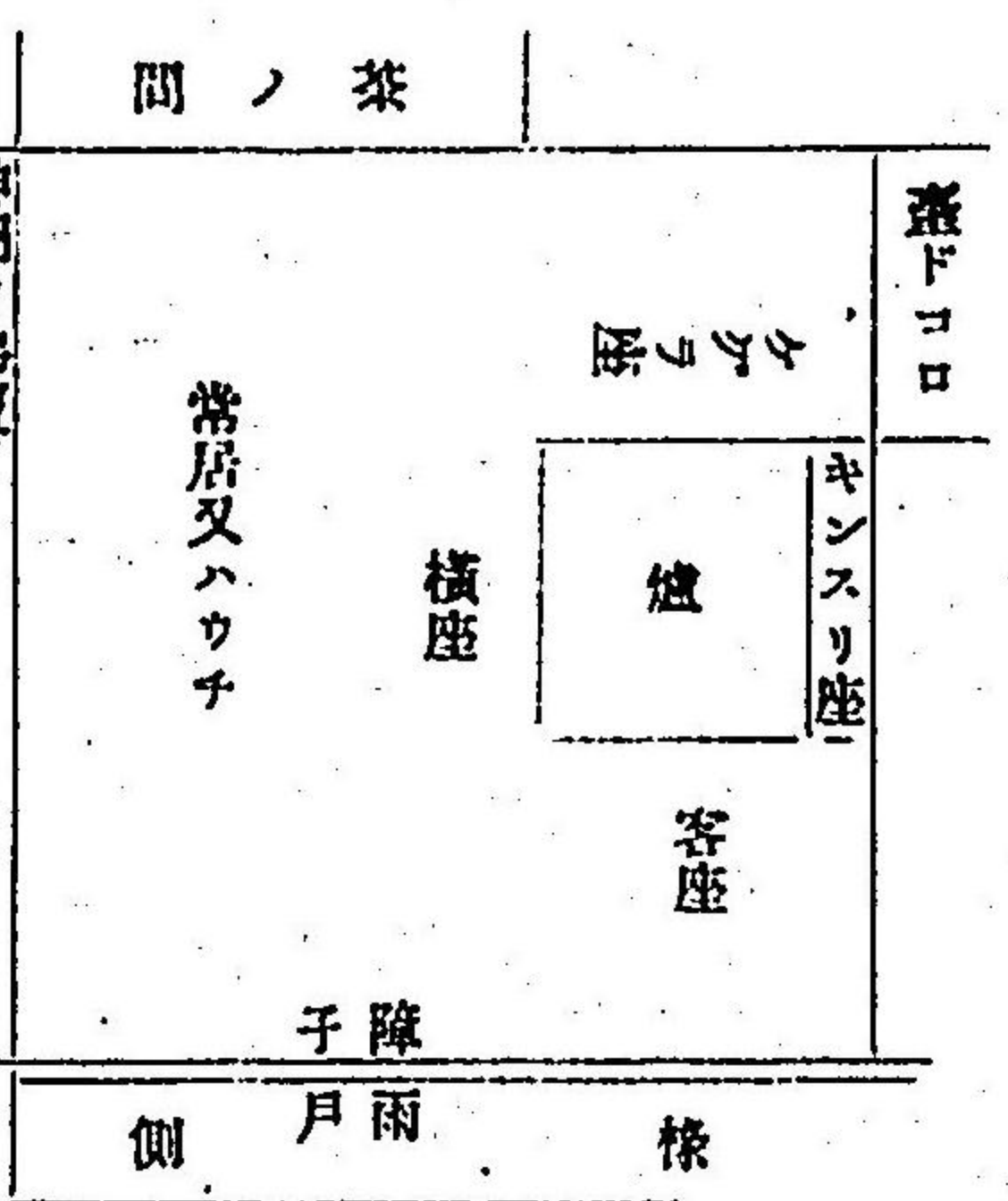
○此地方を旅行し  
て最も心とまるは  
家の形の何れもか  
き家のなることな  
り此手などそのよ  
き例なり

しかりしのみにて、何事の前兆にても非ざりき。  
八〇 右の話をよく呑込む爲には、田尻氏の家のさまを圖  
にする必要あり。遠野一郷の家の建て方は何れも之と大同  
小異なり。





門は此家のは北向なれど、通例は東向なり。右の圖にて厩舎のあるあたりに在るなり。門のことを城前と云ふ。屋敷のめぐりは畠にて、圍牆を設けず。主人の寢室とウチとの間に小さく暗き室あり。之を座頭部屋と云ふ。昔は家に宴會あれば必ず座頭を喚びたり。之を待たせ置く部屋なり。



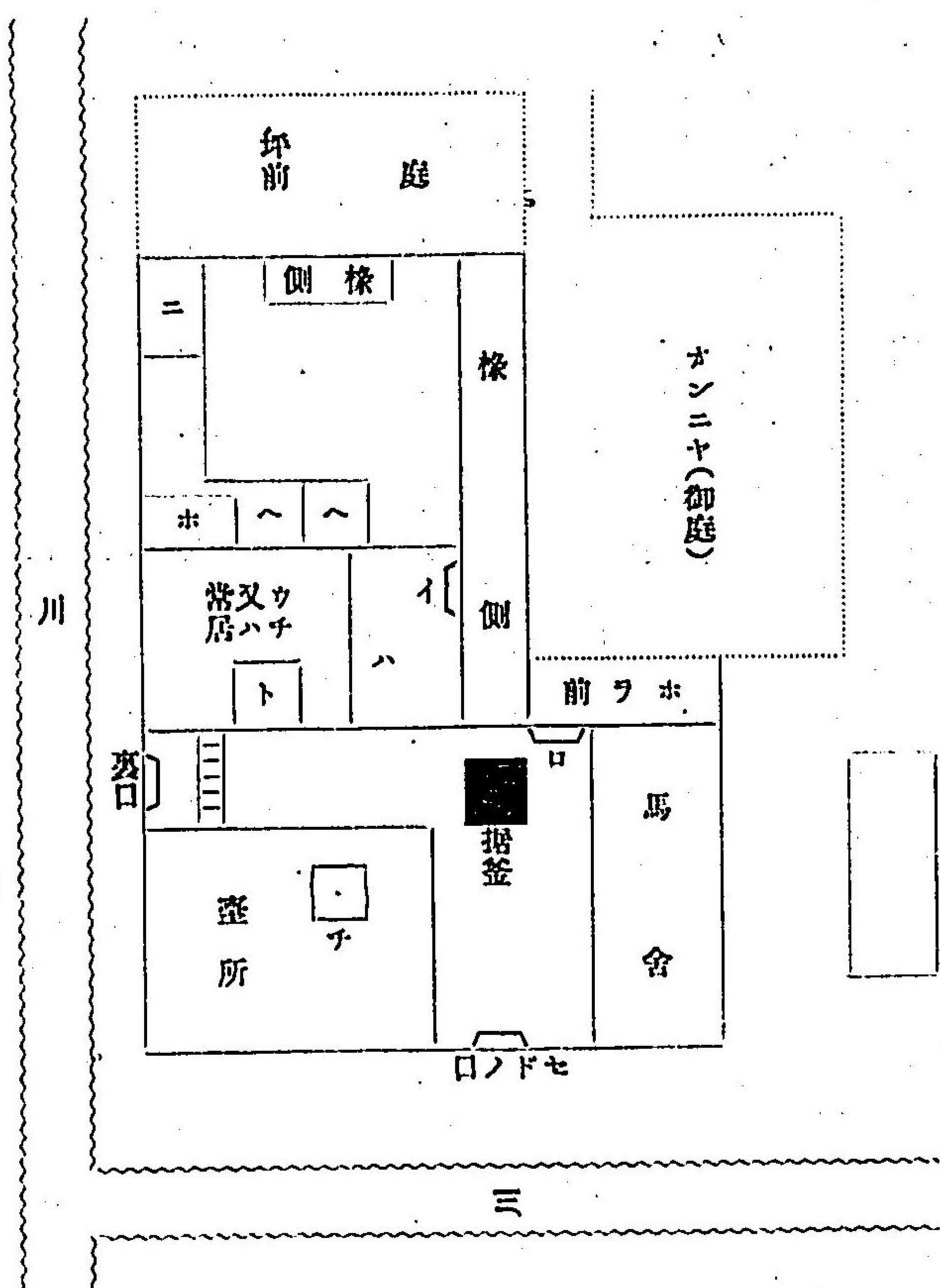
川萬吉と云ふ人あり。二三年前に三十餘にて亡くなりたり。この人も死ぬる二三年前に夜遊びに出で、歸りしに門の

八 一 枋内の字野崎に前

口より廻り縁に沿ひてその角迄來たるとき、六月の月夜のことなり。何心なく雲壁を見れば、ひたと之に附きて寝たる男あり。色の蒼ざめたる顔なり。大に驚きて病みたりしが、此も何の前兆にても非ざり。田尻氏の息子丸吉此人と懇親にて之を聞きたり。

八 二 これは田尻丸吉と云ふ人が自ら遭ひたることなり。少年の頃ある夜、常居より立ちて便所に行かんとして茶の間に入りしに、座敷との境に人立てり。幽かに茫として、あれど衣類の縞も眼鼻もよく見え、髪をば垂れたり。恐ろしけれど、そこへ手を延ばして探りしに、板戸にがたと突き當り、戸のさんにも觸りたり。されど我手は見えずして、其上に影のやうに重なりて人の形あり。その顔の所へ手を遣れば、又

イ 玄關  
ロ 前ノ口  
ハ 茶ノマ  
ニ 佛ダシ  
ホ 佛ダシ  
ヘ 廢マ  
ト ウチノ爐  
チ 壺所ノ爐



手の上に顔見ゆ常居に歸りて人々に話し行燈を持ち行き  
て見たれば既に何物も在らざりき此人は近代的人にて  
伶俐なる人なり又虚言を爲す人にも非ず

八三 山口の大同大洞萬之丞の家の建てざまは少しく外  
の家とはかはれり其剛次の頁に出す玄關は巽の方に向へ  
り極めて古き家なり此家には出して見れば祟ありとて開  
かざる古文書の葛籠一つあり

八四 佐々木氏の祖父は七十ばかりにて三四年前に亡く  
なりし人なり此人の青年の頃と云へば嘉永の頃なるべき  
か海岸の地には西洋人あまた來住してありき釜石にも山  
田にも西洋館あり船越の半島の突端にも西洋人の住みし  
ことあり耶蘇教は密々に行はれ遠野郷にても之を奉じて

礫リツケになりたる者あり。濱に行きたる人の話に、異人はよく抱き合ひては嘗ナめ合ふ者なりなど云ふことを、今でも話にする老人あり。海岸地方には合アの子中々多かりしと云ふことなり。

八五 土淵村の柏崎にては兩親とも正しく日本人にして白子シラコ二人ある家あり。髪も肌も眼も西洋人の通りなり。今は二十六七位なるべし。家にて農業を營む。語音も土地の人とは同じからず。聲細くして鋭スビし。

八六 土淵村の中央にて役場小學校などの在る所を字本宿ソクと云ふ。此所に豆腐屋を業とする政と云ふ者、今三十六七なるべし。此人の父大病にて死なんとする頃、此村と小鳥瀬川を隔てたる字下シモ板内イタナに普請フシヤありて、地固めの堂突ドウツキを爲す

所へ夕方に政の父獨來りて人々に挨拶し、おれも堂突を爲すべしとて暫時仲間に入りて仕事を爲し、稍暗くなりて皆と共に歸りたり。あとにて人々あの人は大病の筈なるに、少し不思議に思ひしが、後に聞けば其日亡くなりたりとのことなり。人々悔みに行き今日のことを語りしが、其時刻は怡も病人が息を引き取らんとする頃なりき。

八七 人の名は忘れたれど、遠野の町の豪家にて、主人大煩して命の境に臨みし頃、ある日ふと菩提寺に訪ひ來れり。和尚鄭重にあしらひ茶などすゝめたり。世間話をしてやがて歸らんとする様子に少々不審あれば、跡より小僧を見せに遣りしに門を出で、家の方に向ひ、町の角を廻りて見えすなれり。其道にてこの人に逢ひたる人まだ外にもあり。誰に

もよく挨拶して常の體なりしが、此晩に死去して勿論其時は外出などすべき様態にてはあらざりし也。後に寺にては茶は飲みたりや否やと茶椀を置きし處を改めしに、壘の敷合せへ皆こぼしてありたり。

八八 此も似たる話なり。土淵村大字土淵の常堅寺は曹洞宗にて、遠野郷十二ヶ寺の觸頭なり。或日の夕方に村人何某と云ふ者、本宿より來る路にて何某と云ふ老人にあへり。此老人はかねて大病をして居る者なれば、いつの間によくなくなりしやと問ふに、二三日氣分も宜しければ、今日は寺へ話を聞きに行くなりとて、寺の門前にて又言葉を掛け合ひて別れたり。常堅寺にても和尚はこの老人が訪ね來りし故出迎へ、茶を進め暫く話をして歸る。これも小僧に見させたるに

○遠野郷には山神の塔多く立てり。其處は皆て山神の祟に違ひ又は山神の祟に達ひ受けたる場所にて神をなだむる爲に建てたる石なり。

門の外にて見えすなりしかば、驚きて和尚に語り、よく見れば亦茶は壘の間にこぼしてあり、老人はその日失せたり。

八九 山口より柏崎へ行くには愛宕山の裾を廻るなり。田圃に續ける松林にて、柏崎の人家見ゆる邊より雑木の林となる。愛宕山の頂には小さき祠ありて、參詣の路は林の中に在り。登口に鳥居立ち、二三十本の杉の古木あり、其旁には又一つのがらんとしたる堂あり。堂の前には山神の字を刻みたる石塔を立つ。昔より山の神出づと言傳ふる所なり。和野の何某と云ふ若者、柏崎に用事ありて夕方堂のあたりを通りしに、愛宕山の上より降り來る丈高き人あり、誰ならんと思ひ林の樹木越しに其人の顔の所を目がけて歩み寄りしに、道の角にてはたと行逢ひぬ。先方は思ひ掛けざりしにや

大に驚きて此方を見たる顔は非常は赤く、眼は耀きて且つ如何にも驚きたる顔なり。山の神なりと知りて後をも見ずに柏崎の村に走り付きたり。

九〇 松崎村に天狗森と云ふ山あり。其麓なる桑島にて村の若者何某と云ふ者働きて居たりしに、頻に睡くなりたれば、暫く島の畔に腰掛けて居眠りせんとせしに、極めて大なる男の顔は眞赤なるが、出で來れり。若者は氣輕にて平生相撲などの好きなる男なれば、この見馴れぬ大男が立ちはだかりて上より見下すやうなるを面悪く思ひ、思はず立上りてお前はどこから來たかと問ふに、何の答もせざれば、一つ突き飛ばしてやらんと思ひ、力自慢のまゝ飛びかゝり手を掛けたりと思ふや否や、却りて自分の方が飛ばされて氣を

失ひたり。夕方に正氣づきて見れば無論その大男は居らず。家に歸りて後人に此事を話したり。其秋のことなり。早地峯の腰へ村人大勢と共に馬を曳きて萩を行き、さて歸らんとする頃になりて此男のみ姿見えず。一同驚きて尋ねたれば、深き谷の奥にて手も足も一つ一つ抜き取られて死して居たりと云ふ。今より二三十年前のことにて、此時の事をよく知れる老人も今に存在せり。天狗森には天狗多く居ると云ふことは昔より人の知る所なり。

九一 遠野の町に山々の事に明るき人あり。もとは南部男爵家の鷹匠なり。町の人綽名して鳥御前と云ふ。早地峯、六角牛の木や石や、すべて其形状と在所を知れり。年取りて後輩探りにとて一人の連と共に出でたり。この連の男と云ふ

は水練の名人にて、藁と槌とを持ちて水の中に入り、草鞋を作りて出て來ると云ふ評判の人なり。さて遠野の町と猿ヶ石川を隔つる向山と云ふ山より、綾織村の緞石とて珍しき岩のある所の少し上の山に入り、兩人別れくになり、鳥御前一人は又少し山を登りしに、恰も秋の空の日影、西の山の端より四五間ばかりなる時刻なり。ふと大なる岩の陰に、緒き顔の男と女とが立ちて何か話をして居るに出逢ひたり。彼等は鳥御前の近づくを見て、手を擴げて押戻すやうなる手つきを爲し制止したれども、それにも構はず行きたるに女は男の胸に縋るやうにしたり。事のさまより眞の人間にてはあるまじと思ひながら、鳥御前はひやうきんな人なれば、戯れて遣らんとて腰なる切刃を抜き、打ちかゝるやうに

したれば、その色緒き男は足を舉げて蹴たるかと思ひしが、忽ちに前後を知らず、連なる男は之を探しまはりて谷底に氣絶してあるを見付け、介抱して家に歸りたれば、鳥御前は今日の一部始終を話し、かゝる事は今までに更になきことなり。おのれは此爲に死ぬかも知れず、外の者には誰にも言ふなと語り、三日程の間病みて身まかりたり。家の者あまりに其死にやうの不思議なればとて、山臥のケンコウ院と云ふに相談せしに、其答には、山の神たちの遊べる所を邪魔したる故、その祟をうけて死したるなりと言へり。此人は伊能先生なども知合なりき。今より十餘年前の事なり。

九二 昨年のことなり。土淵村の里の子十四五人にて、早地峯に遊びに行き、はからず夕方近くなりたれば、急ぎて山を

下り麓近くなる頃、丈の高き男の下より急ぎ足に昇り來るに逢へり。色は黒く眼はきら／＼として、肩には麻かと思はる。古き淺葱色の風呂敷にて小さき包を負ひたり。恐ろしかりしかども子共の中の一人、どこへ行くか。此方より聲を掛けたるに、小國さ行く。と答ふ。此路は小國へ越ゆべき方角には非ざれば、立ちどまり不審する程に、行き過ぐると思ふ間もなく、早見えすなりたり。山男よと口々に言ひて皆々逃げ歸りたりと云へり。

九三 此れは和野の人菊池菊藏と云ふ者、妻は笛吹峠のあなたなる橋野より來たる者なり。この妻親里へ行きたる間に、絲藏と云ふ五六歳の男の兒病氣になりたれば、晝過ぎより笛吹峠を越えて妻を連れに親里へ行きたり。名に負ふ六

○ウドとは兩側高  
く切込みたる路の  
ことなり。東海道の  
諸國にてウタウ坂  
論に於ては、ウタウ  
坂にての如き小坂  
へ切通しのことな  
らん。

○象坪は地名にし  
て、且つ藤七の名  
なり。象坪と云ふ地  
名の中にて之を研  
究答

角牛の峯續きなれば山路は樹深く、殊に遠野分より栗橋分へ下らんとするあたりは、路はウドになりて兩方は岨なり。日影は此岨に隠れてあたり稍薄暗くなりたる頃後の方より菊藏と呼ぶ者あるに、振返りて見れば、崖の上より下を覗くものあり。顔は赭く眼の光りかゝやけること前の話の如し。お前の子はもう死んで居るぞと云ふ。この言葉を聞きて恐ろしさよりも先にはつと思ひたりしが、早其姿は見えず。急ぎ夜の中に妻を伴ひて歸りたれば、果して子は死してありき。四五年前のことなり。

九四 この菊藏、柏崎なる姉の家用に用ありて行き、振舞はれたる残りの餅を懐に入れて、愛宕山の麓の林を過ぎしに、象坪の藤七と云ふ大酒呑にて彼と仲善の友に行き逢へり。そ

こは林の中なれど少しく芝原ある所なり藤七はにこくとしてその芝原を指しこゝで相撲を取らぬかと云ふ菊藏之を諾し二人草原にて暫く遊びしがこの藤七如何にも弱く軽く自由に抱へては投げらるゝ故面白きまゝに三番まで取りたり藤七が曰く今日はとてもかなはずさあ行くべしとて別れたり四五間も行き後心付きたるにかの餅見えす相撲場に戻りて探したれど無し始めて狐ならんかと思ひたれど外聞を恥ぢて人にも言はざりしが四五日の後酒屋にて藤七に逢ひ其話をせしにおれは相撲など取るものかその日は濱へ行きてありしものをと言ひて愈狐と相撲を取りしこと露顯したりされど菊藏は猶他の人々には包み隠してありしが昨年の正月の休に人々酒を飲み狐の

話をせしときおれも實はと此話を白狀し大に笑はれたり  
**九五** 松崎の菊池某と云ふ今年四十三四の男庭作りの上手にて山に入り草花を掘りては我庭に移し植ゑ形の面白き岩などは重きを厭はず家に擔ひ歸るを常とせり或日少し氣分重ければ家を出で山に遊びしに今までつひに見たることなき美しき大岩を見付けたり平生の道樂なれば之を持ち歸らんと思ひ持ち上げんとせしが非常に重し恰も人の立ちたる形して丈もやがて人ほどありされどほしさの餘之を負ひ我慢して十間ばかり歩みしが氣の遠くなる位重ければ恠しみを爲し路の旁に之を立て少しくもたれかゝるやうにしたるにそのまゝ石と共にすつと空中に昇り行く心地したり雲より上になりたるやうに思ひしが



實に明るく清き所にて、あたりに色々の花咲き、しかも何處とも無く大勢の人聲聞えたり。されど石は猶益昇り行き、終には昇り切りたるか、何事も覺えぬやうになりたり。其後時過ぎて心付きたる時は、やはり以前の如く不思議の石にもたれたるまゝにてありき。此石を家の内へ持ち込みては如何なる事あらんも測りがたしと、恐ろしくなりて遁げ歸りぬ。この石は今も同じ所に在り、折々は之を見て再びほしくなることありと云へり。

九六 遠野の町に芳公馬鹿とて三十五六なる男、白痴にて一昨年まで生きてありき。此男の癖は路上にて木の切れ塵などを拾ひ、之を捻りてつく／＼と見つめ、又は之を嗅ぐことなり。人の家に行きては柱などをこすりて其手を嗅ぎ、何

物にても眼の先まで取り上げにこゝとして折々之を嗅ぐなり。此男往來をあるきながら急に立ち留り、石などを拾ひ上げて之をあたりの人家に打ち付け、けたましく火事だ火事だと叫ぶことあり。かくすれば其晩か次の日か物を投げ付けられたる家火を發せざることなし。同じこと幾度と無くあれば、後には其家々も注意して豫防を爲すと雖、終に火事を免れたる家は一軒も無しと云へり。

九七 飯豊の菊池松之丞と云ふ人、傷寒を病み、度々息を引きつめし時、自分は田圃に出で、菩提寺なるキセイ院へ急ぎ行かんとす。足に少し力を入れたるに、圖らず空中に飛上り、凡そ人の頭ほどの所を次第に前下りに行き、又少し力を入るれば昇ること始の如し。何とも言はれず快し、寺の門に

近づくに人群集せり。何故ならんと訝りつゝ門を入れば紅  
の芥子の花咲満ち見渡す限も知らずいよ／＼心持よしこ  
の花の間に亡くなりし父立てり。お前も来たのかと云ふこ  
れに何か返事をしながら猶行くに以前失ひたる男の子居  
りてトツチャお前も来たかと云ふお前はこゝに居たのか  
と言ひつゝ近よらんとすれば今來てはいけないと云ふ此  
時門の邊にて騒しく我名を喚ぶ者ありてうるさきこと限  
なけれど據なければ心も重くいや／＼ながら引返したり  
と思へば正氣付きたり。親族の者寄り集ひ水など打ちそゝ  
ぎて喚生かしたるなり。

九八 路の傍に山の神田の神塞の神の名を彫りたる石を  
立つるは常のことなり。又早地峯山六角牛山の名を刻した

る石は遠野郷にもあれどそれよりも濱に殊に多し。

九九 土淵村の助役北川清と云ふ人の家は字火石に在り。  
代々の山臥にて祖父は正福院と云ひ學者にて著作多く村  
の爲に盡したる人なり。清の弟に福二と云ふ人は海岸の田  
の濱へ聲に行きたるが先年の大海嘯に遭ひて妻と子を  
失ひ生き残りたる二人の子と共に元の屋敷の地に小屋を  
掛けて一年ばかりありき。夏の初の月夜に便所に起き出で  
しが遠く離れたる所に在りて行く道も浪の打つ渚なり。霧  
の布きたる夜なりしがその霧の中より男女二人の者の近  
よるを見れば女は正しく亡くなりし我妻なり。思はず其跡  
をつけて遙々と船越村の方へ行く崎の洞ある所まで追ひ  
行き名を呼びたるに振返りてにこと笑ひたり。男はと見れ

ば此も同じ里の者にて海嘯の難に死せし者なり。自分が聲に入りし以前に互に深く心を通はせたりと聞きし男なり。今は此人と夫婦になりてありと云ふに、子供は可愛くは無いかと云へば、女は少しく顔の色を變へて泣きたり。死したる人と物言ふとは思はれずして、悲しく情なくなりたれば、足元を見て在りし間に、男女は再び足早にそこを立ち退きて、小浦へ行く道の山陰を廻り見えすなりたり。追ひかけて見たりしが、ふと死したる者なりしと心付き、夜明まで道中に立ちて考へ、朝になりて歸りたり。其後久しく煩ひたりと云へり。

一〇〇 船越の漁夫何某、ある日仲間キリの者と共に吉利吉里より歸るとて、夜深く四十八坂のあたりを通りしに、小川の

ある所にて一人の女に逢ふ。見れば我妻なり。されどもかゝる夜中に獨此邊に來べき道理なければ、必定化物ならんと思ひ定め、矢庭に魚切庖丁を持ちて後の方より差し通したれば、悲しき聲を立て、死したり。暫くの間は正體を現はさざれば、流石に心に懸り、後の事を連の者に頼み、おのれは馳せて家に歸りしに、妻は事も無く家に待ちてあり。今恐ろしき夢を見たり。あまり歸りの遅ければ、夢に途中まで見に出でたるに、山路にて何とも知れぬ者に脅かされて、命を取らるゝと思ひて目覺めたりと云ふ。さてはと合點して再び以前の場所へ引返して見れば、山にて殺したりし女は連の者が見てをる中につひに一匹の狐となりたりと云へり。夢の野山に行くに此獸の身を備ふことありと見ゆ。

一〇一 旅人豊間根村を過ぎ、夜更け疲れたれば、知音の者の家に燈火の見ゆるを幸に、入りて休息せんとせしに、よき時に來合せたり、今夕死人あり、留守の者なくて如何にせんかと思ひし所なり、暫くの間頼むと云ひて主人は人を喚びに行きたり、迷惑千萬なる話なれど是非も無く、圍爐裡の側にて煙草を吸ひてありしに、死人は老女にて奥の方に寢させたるが、ふと見れば床の上にむく／＼と起直る。膽潰れたれど心を鎮め静かにあたりを見廻すに、流し元の水口の穴より狐の如き物あり、面をさし入れて頻に死人の方を見つめて居たり。さてこそと身を潜め、窈かに家の外に出で、背戸の方に廻りて見れば、正しく狐にて首を流し元の穴に入れ、後足を爪立て、居たり。有合はせたる棒をもて之を打ち殺

したり。

一〇二 正月十五日の晩を小正月と云ふ。宵の程は子供等福の神と稱して四五人群を作り、袋を持ちて人の家に行き、明の方から福の神が舞込んだと唱へて餅を貰ふ習慣あり。宵を過ぐれば此晩に限り人々決して戸の外に出づることなし。小正月の夜半過ぎは山の神出で、遊ぶと言ひ傳へてあれば也。山口の字丸古立におまさと云ふ今三十五六の女、まだ十二三の年のことなり。如何なるわけにてか唯一人にて福の神に出で、處々をあるきて遅くなり、淋しき路を歸りしに、向の方より丈の高き男來てすれちがひたり。顔はすてきに赤く眼はかゝやけり。袋を捨て、逃げ歸り大に煩ひたりと云へり。

○五穀の占、月の  
占多少のワリエテ  
な以て諸國に行は  
る陰陽道に出でし  
のならん

一〇三 小正月の夜、又は小正月ならずとも冬の満月の夜は、雪女が出で、遊ぶとも云ふ。童子をあまた引連れて來ると云へり。里の子ども冬は近邊の丘に行き、橋遊リソコテをして面白さのあまり夜になることあり。十五日の夜に限り、雪女が出るから早く歸れと戒めらるゝは常のことなり。されど雪女を見たりと云ふ者は少なし。

一〇四 小正月の晩には行事甚だ多し。月見と云ふは六つの胡桃の實を十二に割り、一時に爐の火にくべて一時に之を引上げ、一列にして右より正月二月と數ふるに、満月の夜晴なるべき月にはいつまでも赤く、曇るべき月には直スグに黒くなり、風ある月にはフー／＼と音をたて、火が振ユふなり。何遍繰返しても同じことなり。村中何れの家にも同じ結

果を得るは妙なり。翌日は此事を語り合ひ、例へば八月の十  
五夜風とあらば、其歳の稻の刈入カシを急ぐなり。

一〇五 又世中見ヨチミと云ふは、同じく小正月の晩に、色々の米にて餅をこしらへて、鏡と爲し、同種の米を膳の上に平らに敷き、鏡餅をその上に伏せ、鍋を被せ置きて翌朝之を見るなり。餅に附きたる米粒の多きもの其年は豊作なりとして、早中晩の種類を擇び定むるなり。

一〇六 海岸の山田にては、蜃氣樓年々見ゆ。常に外國の景色なりと云ふ。見馴れぬ都のさまにして、路上の車馬しげく人の往來眼ざましきばかりなり。年毎に家の形など聊も違ふこと無しと云へり。

一〇七 上郷村に河ぶちのうちと云ふ家あり。早瀬川の岸

に在り此家の若き娘ある日河原に出で、石を拾ひてありしに、見馴れぬ男來り、木の葉とか何とかを娘にくれたり、丈高く面朱のやうなる人なり、娘は此日より占の術を得たり、異人は山の神にて、山の神の子になりたるなりと云へり、  
一〇八 山の神の乗り移りたりとて占を爲す人は所々に在り、附馬牛村にも在り、本業は木挽なり、柏崎の孫太郎もこれなり、以前は發狂して喪心したりしに、ある日山に入りて山の神より其術を得たりし後は、不思議に人の心中を讀むこと驚くばかりなり、その占ひの法は世間の者とは全く異なり、何の書物をも見ず、頼みに來たる人と世間話を爲し、その中にふと立ちて常居の中をあちこちとあるき出すと思ふ程に、其人の顔は少しも見ずして心に浮びたることを云

ふなり、當らずと云ふこと無し、例へばお前のウチの板敷を取り離し、土を掘りて見よ、古き鏡又は刀の折れあるべし、それを取り出さねば近き中に死人ありとか家が焼くるとか言ふなり、歸りて掘りて見るに必ずあり、かゝる例は指を屈するに勝へず。

一〇九 盆の頃には雨風祭とて藁にて人よりも大なる人形を作り、道の岐に送り行きて立つ、紙にて顔を描き瓜にて陰陽の形を作り添へなどす、蟲祭の藁人形にはかゝること無く、其形も小さし、雨風祭の折は一部落の中にて頭屋を擇び定め、里人集りて酒を飲みて後、一同笛太鼓にて之を道の辻まで送り行くなり、笛の中には桐の木にて作りたるホラなどあり、之を高く吹く、さて其折の歌は二百十日の雨風

○東國輿地勝覽に依れば、韓國にても、北の北に、城の北に、見ゆ。方には、必ず、城の北に、見ゆ。共に、武神の信仰し、より、來れるなるべし。

まつるよ、どちの方さ祭る、北の方さ祭る』と云ふ。  
一〇 ゴンゲサマと云ふは、神樂舞の組毎に一つづゝ備はれる木彫の像にして、獅子頭とよく似て、少しく異なれり。甚だ御利生のあるものなり。新張の八幡社の神樂組のゴンゲサマと、土淵村字五日市の神樂組のゴンゲサマと、曾て途中にて争を爲せしことあり。新張のゴンゲサマ負けて片耳を失ひたりとて、今も無し。毎年村々を舞ひてあるく故、之を見知らぬ者なし。ゴンゲサマの靈験は殊に火伏に在り。右の八幡の神樂組曾て附馬牛村に行きて、日暮れ宿を取り兼ねしに、ある貧しき者の家にて、快く之を泊めて、五升枴を伏せて、其上にゴンゲサマを座を置き、人々は臥したりしに、夜中になつて、物を噛む音のするに驚きて起きて見れば、軒

○ダンノハナは、丘の頂なるべし。築きたる場所なるべし。境の神を祭る爲に、野も此類なるべき。八頁に首へり。

端に火の燃え付きてありしを、枴の上なるゴンゲサマ飛び上り飛び上りして、火を喰ひ消してありし也と。子供の頭を病む者など、よくゴンゲサマを頼み、その病を噛みてもらふことあり。  
一一 山口飯豊、附馬牛の字、荒川東禪寺及火渡、青笹の字、中澤竝に土淵村の字、土淵に、ともにダンノハナと云ふ地名あり。その近傍に之と相對して、必ず逆臺野と云ふ地あり。昔は六十を超えたる老人は、すべて此逆臺野へ追ひ遣るの習ありき。老人は徒に死んで了ふこともならぬ故に、日中は里へ下り農作して口を糊したり。その爲に、今も山口土淵邊にては、朝に野らに出づるをハカガチと云ひ、夕方野らより歸ることをハカアガリと云ふと云へり。

○外の村々にても  
之に似たりと云ふ

○星谷と云ふ地名  
は諸國に在り星を  
祭りし所なり

○ホウリヤウ横現  
一は遺野を始め奥羽  
なり蛇の神なりと  
云ふ名義を知らず

一一二 ダンノハナは昔館の有りし時代に囚人を斬りし場所なるべしと云ふ。地形は山口のも土淵飯豊のも略同様にて、村境の岡の上なり。仙臺にも此地名あり。山口のダンノハナは大洞へ越ゆる丘の上にて館址よりの續きなり。蓮臺野は之と山口の民居を隔て、相對す。蓮臺野の四方はすべて澤なり。東は即ちダンノハナとの間の低地、南の方を星谷と云ふ。此所には蝦夷屋敷と云ふ四角に凹みたる所多く有り。其跡極めて明白なり。あまた石器を出す。石器土器の出る處山口に二ヶ所あり。他の一は小字をホウリヤウと云ふ。この土器と蓮臺野の土器とは様式全然殊なり。後者ののは技巧聊かも無く、ホウリヤウのは模様なども巧なり。埴輪もこゝより出づ。又石斧石刀の類も出づ。蓮臺野には蝦夷錢とて

○ジャウツカは定  
塚、庄、塚、又は  
なご、ま、か、き、は  
境のあたりにありし  
に、あま、た、り、し、は  
境のあたりにありし  
に、あま、た、り、し、は  
境のあたりにありし  
に、あま、た、り、し、は

土にて錢の形をしたる徑二寸ほどの物多く出づ。是には單純なる渦紋などの模様あり。字ホウリヤウには丸玉管玉も出づ。こゝの石器は精巧にて石の質も一致したるに、蓮臺野のは原料色々なり。ホウリヤウの方は何の跡と云ふことも無く、狭き一町歩ほどの場所なり。星谷は底の方今は田と成れり。蝦夷屋敷は此兩側に連りてありし也と云ふ。此あたり掘れば崇ありと云ふ場所二ヶ所ほどあり。

一一三 和野にジャウツカ森と云ふ所あり。象を埋めし場所なりと云へり。此處だけには地震なしとて、近邊にては地震の折はジャウツカ森へ遁げよと昔より言ひ傳へたり。此は確かに人を埋めたる墓なり。塚のめぐりには堀あり。塚の上には石あり。之を掘れば崇ありと云ふ。



なきに非ず塚を殊  
と云ふことし東國  
の風なり

一一四 山口のダンノハナは今は共同墓地なり。岡の頂上にうつ木を栽ゑめぐらし其口は東方に向ひて門口めきたる所あり。其中程に大なる青石あり。曾て一たび其下を掘りたる者ありしが何物をも發見せず。後再び之を試みし者は大なる瓶あるを見たり。村の老人たち大に叱りければ、又もとのまゝに爲し置きたり。館の主の墓なるべしと云ふ。此所に近き館の名はボンシヤサの館と云ふ。幾つかの山を掘り削りて水を引き、三重四重に堀を取り廻らせり。寺屋敷砥石森など云ふ地名あり。井の跡とて石垣残れり。山口孫左衛門の祖先こゝに住めりと云ふ。遠野古事記に詳かなり。

一一五 御伽話のことを昔々云ふ。ヤマハ、の話最も多くあり。ヤマハ、は山姥のことなるべし。其一つ二つを次に

記すべし。

一一六 昔々ある所にト、とガマとあり。娘を一人持てり。娘を置きて町へ行くとして、誰が來ても戸を明けるなど戒しめ、鍵を掛けて出でたり。娘は恐ろしければ一人爐にあたりすくみて居たりしに、真晝間に戸を叩きてこゝを開けと呼ぶ者あり。開かずば蹴破るぞと嚇す故に、是非なく戸を明けたれば入り來たるはヤマハ、なり。爐の横坐に踏みはたかりて火にあたり、飯をたきて食はせよと云ふ。其言葉に従ひ膳を支度してヤマハ、に食はせ、其間に家を遁げ出したるに、ヤマハ、は飯を食ひ終りて娘を追ひ來り、追々に其間近く今にも背に手の觸るゝばかりになりし時、山の蔭にて柴を刈る翁に逢ふ。おれはヤマハ、にぼつかけられてあるな

り、隠して呉れよと頼み、苜り置きたる柴の中に隠れたり。ヤマハ、尋ね来りて、どこに隠れたかと柴の束をのけんとし、て柴を抱へたるまゝ山より滑り落ちたり。其隙にこゝを遁れて又萱を刈る翁に逢ふ。おれはヤマハ、にぼつかけられてあるなり、隠して呉れよと頼み、苜り置きたる萱の中に隠れたり。ヤマハ、は又尋ね来りて、どこに隠れたかと萱の束をのけんとして、萱を抱へたるまゝ山より滑り落ちたり。其隙に又こゝを遁れ出で、大きな沼の岸に出でたり。此よりは行くべき方も無ければ、沼の岸の大木の梢に昇りゐたり。ヤマハ、はどけえ行つたさて遁がすものかとて、沼の水に娘の影の映れるを見て、すぐに沼の中に飛び入りたり。此間に再び此所を走り出で、一つの笹小屋のあるを見付け、中

に入りて見れば若き女あり。此にも同じことを告げて石の唐櫃のありし中へ隠してもらひたる所へ、ヤマハ、又飛び来り娘のありかを問へども、隠して知らずと答へたれば、いんね來ぬ筈は無い、人くさい香がするものと云ふ。それは今雀を炙つて食つた故なるべしと言へば、ヤマハ、も納得して、そんなら少し寝ん、石のからうどの中にしやうか、木のからうどの中がよいか、石はつめたし、木のからうどの中にと言ひて、木の唐櫃の中に入りて寝たり。家の女は之に鍵を下し、娘を石のからうどより連れ出し、おれもヤマハ、に連れて來られたる者なれば、共に之を殺して里へ歸らんとて、錐を紅く焼きて木の唐櫃の中に差し通したるに、ヤマハ、はかくとも知らず、只二十日鼠が來たと言へり。それより

湯を煮立て、焼雉の穴より注ぎ込みて、終に其ヤマハ、を殺し二人共に親々の家に歸りたり。昔々の話の終は何れもコレデドンドハレと云ふ語を以て結ぶなり。

一一七 昔々これもある所にト、とガッと娘の嫁に行く支度を買ひに町へ出で行くとして戸を鎖し誰が來ても明けるなよ、はアと答へたれば出でたり。晝の頃ヤマハ、來りて娘を取りて食ひ、娘の皮を被り娘になりて居る。夕方二人の親歸りて、おりこひめこ居たかと門の口より呼べば、あゝたます、早かつたなしと答へ、二親は買ひ來たりし色々の支度の物を見せて娘の悦ぶ顔を見たり。次の日夜の明けたる時、家の鶏羽ばたきして、糠屋の隅ツ子見ろぢや、けゝろと啼く。はて常に變りたる鶏の啼きやうかなと二親は思ひたり。そ

○糠屋は物おきな

れより花嫁を送り出すとてヤマハ、のおりこひめこを馬に載せ、今や引き出さんとするとき又鶏啼く、其聲は、おりこひめこを載せなえでヤマハ、のせた、けゝろと聞ゆ之を繰り返して歌ひしかば、二親も始めて心付き、ヤマハ、を馬より引き下して殺したり。それより糠屋の隅を見に行きしに娘の骨あまた有りたり。

一一八 紅皿缺皿の話も遠野郷に行はる。只缺皿の方はその名をヌカボと云ふ。ヌカボは空穂のことなり。繼母に悪まれたれど神の恵ありて、終に長者の妻となると云ふ話なり。エピソードには色々の美しき繪様あり。折あらば詳しく書記すべし。

一一九 遠野郷の獅子踊に古くより用ゐたる歌の曲あり。

○獅子踊はさまで此地方に古きもの

に非ず中代之を輪  
とせしものなるこ  
とを人よく知れり

村により人によりて少しづゝの相異あれど、自分の聞きた  
るは次の如し、百年あまり以前の筆寫なり。

橋ほめ

一 まゐり來て此橋を見申せや、いかなもをざは踏みそ  
めたやら、わたるがくかいざるもの

一 此御馬場を見申せや、杉原七里大門まで

門ほめ

一 まゐり來て此もんを見申せや、ひの木さわらで門立  
て、是ぞ目出たい白かねの門

一 門の戸びらおすひらき見申せや、あらの御せだい

○

一 まゐり來てこの御本堂を見申せや、いかな大工は建

てたやら

一 建てた御人は御手ごから、むかしひたのたくみの立  
てた寺也

小島ぶし

一 小島ではひの木さわらで門立て、是ぞ目出たい白

金の門

一 白金の門戸びらおすひらき見申せや、あらの御せだ  
い

一 八つ棟ちくりにひわだぶきの上におひたるから松

一 から松のみぎり左に涌くいぢみ、汲めども呑めども

つきひざるもの

一 あさ日さすよう日かやく大寺也、さくら色のちご

は百人

一 天からおづるちよ硯水、まつて立たれる

馬屋ほめ

一 まゐり来てこの御臺所見申せや、め釜を釜に釜は十

六

一 十六の釜で御代たく時は、四十八の馬で朝草刈る

一 其馬で朝草にききやう小萱を刈りませて、花でかゝやく馬屋なり

一 かゝやく中のかげ駒は、せたいあがれと足がきする

○

一 此庭に歌のぞうじはありと聞く、あしびながらも心はづかし

一 われくはきによならひしけふあすぶ、そつ事ごめんなり

一 しやうち申せや限なし、一禮申して立てや友だつ

楸形ほめ

一 まゐり来てこの楸を見申せや、四方四角楸形の庭也

一 まゐり来て此宿を見申せや、人のなさげの宿と申

町ほめ

一 参り来て此お町を見申せや、堅町十五里横七里、△△

出羽にまよおな友たつ

けんだんほめ

一 まゐり来てこのけだん様を見申せや、御町間中にはたを立前

○出羽の字も實は不明なり

○すは珠敷、り

一 まいは立町油町

一 けんだん殿は二かい座敷に晝寝すて、錢を枕に金の  
手遊

一 参り來てこの御札見申せば、おすがいろちきあるま  
じき札

一 高き處は城と申し、びくき處は城下と申す也  
橋ほめ

一 まわり來てこの橋を見申せば、この金の辻に白金のは  
し

上ほめ

一 まわり來てこの御堂見申せや、四方四面くさび一本  
扇とりすゝ取り、上さ参らばりそうある物

そうは利生か

○こりばすら文字  
不分明

家ほめ

一 こりばすらに小金のたる木に、水のせ懸るぐしにな  
みたち

浪合

一 此庭に歌の上ずはありと聞く、歌へながらも心はづ  
かし

一 おんげんべりこおらいべり、山と花ごぎ是の御庭へ  
さららすかれ

一 まぎゑの臺に玉のさかすきよりすゑて、是の御庭へ  
直し置く

一 十七はちやうすひやけ御手にもちをすやく廻や御  
庭かゝやく

○雲間縁、高麗縁  
なり

○すかの子は鹿の  
子なり遠野の獅子  
踊の面は鹿のやう  
なり  
○ちのみがきは鹿  
の角鹿きなるべし

- 一 この御酒一つ引受たもるなら命長くじめうさかよ  
る
- 一 さかなには鯛もすいきもござれ共おどにきこいし  
からのかるうめ
- 一 正ち申や限なし、一禮申て立や友たつ、京  
柱懸り
- 一 仲だち入れよや仲入れろ、仲たづなけれや庭はすん  
げない
- 一 すかの子は生れておりれや山めぐる、我等も廻る庭  
めぐる
- 一 これの御庭におい柱の立つときは、ちのみがき若く  
なるもの

○ちたは葛

○びよぼば屏風な  
り三よへは三四重  
か此歌最もおもし  
るし

○めすぐりは鹿  
の妻擲びなるべし

○して字はてと  
あり不明

- 一 松島の松をそだて、見どすれば、松にからするちた  
のえせもの
- 一 松島の松にからまるちたの葉も、えんが無れやぶろ  
りふぐれる
- 一 京で九貫のから繪のびよぼ、三よへにさらりたてま  
はす  
めすぐり
- 一 仲たち入れろや仲入れろ、仲立なけれや庭すんげな  
え
- 一 鹿の子は生れおりれや山廻る、我らもめぐる庭を廻  
るな
- 一 女鹿たづねていかんとして白山の御山かすみか

○うるすやなは餅  
じやな也

- 一 うるすやな風はかすみを吹き拂て、今こそ女鹿あけてたちねるゝ
- 一 何と女鹿はかくれてもひと村すゝきあけてたつねるゝ
- 一 笹のこのはの女鹿子は、何とかくてもおひき出さる
- 一 女鹿大鹿ふりを見る、鹿の心みやこなるものゝ
- 一 奥のみ山の大鹿は、ことすはじめておどりでき候ゝ
- 一 女鹿とらてあうがれて心ちくすくをろ鹿かなゝ
- 一 松島の松をそだてゝ見とすれば松にからまるちたのえせものゝ
- 一 松島の松にからまるちたの葉も、えんがなけれやぞ

ろりふぐれるゝ

- 一 沖のど中の濱す鳥、ゆらりこがれるそろりたつ物ゝ  
なげくさ
- 一 なげくさを如何御人は御出あつた、出た御人は心ありがたい
- 一 この代を如何な大工は御指しあた、四つ角て寶遊ばしゝ
- 一 この御酒を如何な御酒だと思し召す、おどに聞いしがゝ菊の酒ゝ
- 一 此錢を如何な錢たと思し召す、伊勢お八まち錢熊野參の遣ひあまりかゝ
- 一 此紙を如何な紙と思し召す、はりまだんせかかしま

○播磨壇紙にや



○いぢくなりはい  
づこなるなり三内  
の字不明にかく  
よめり

紙か、おりめにそたひ遊はし

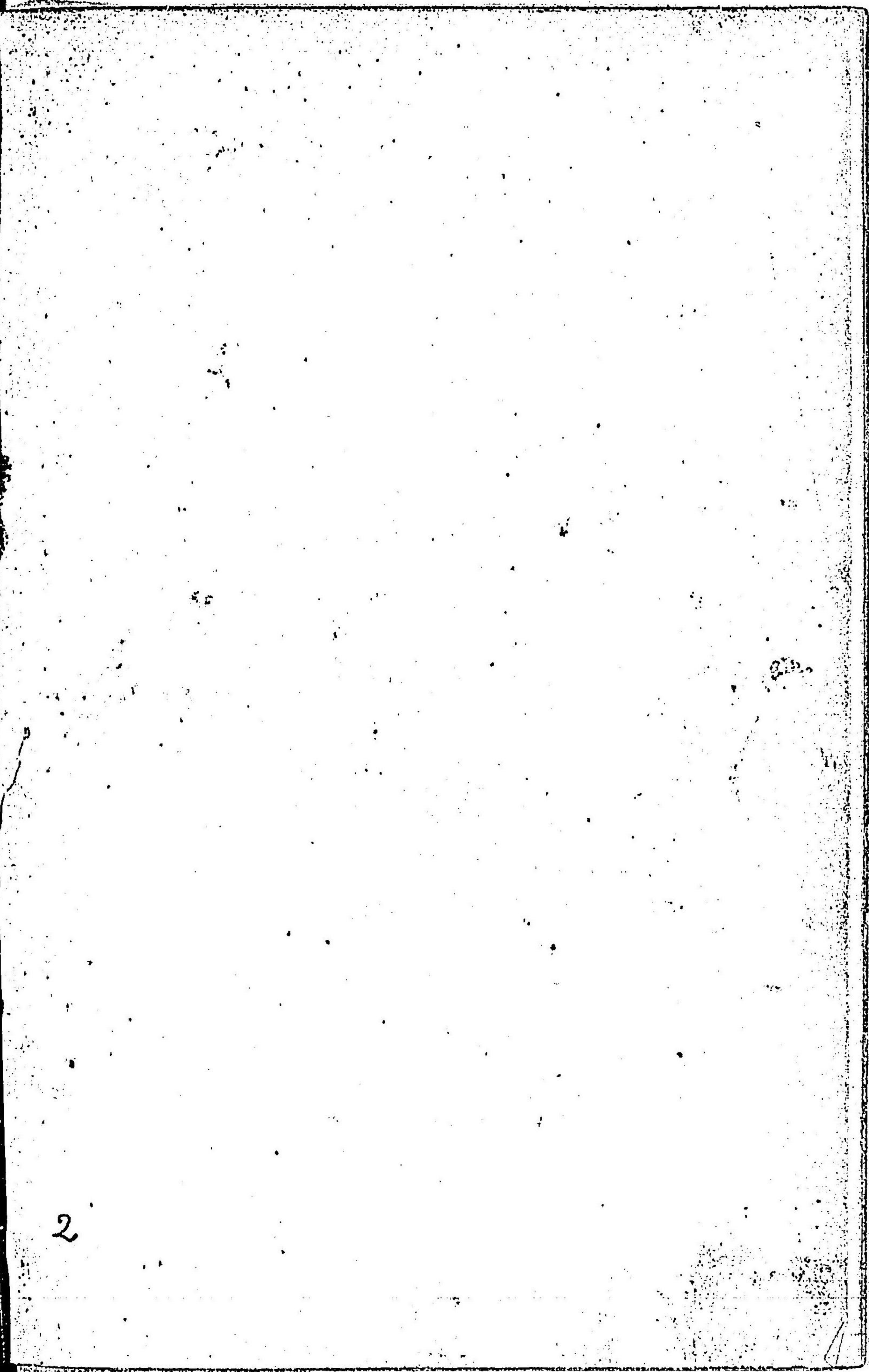
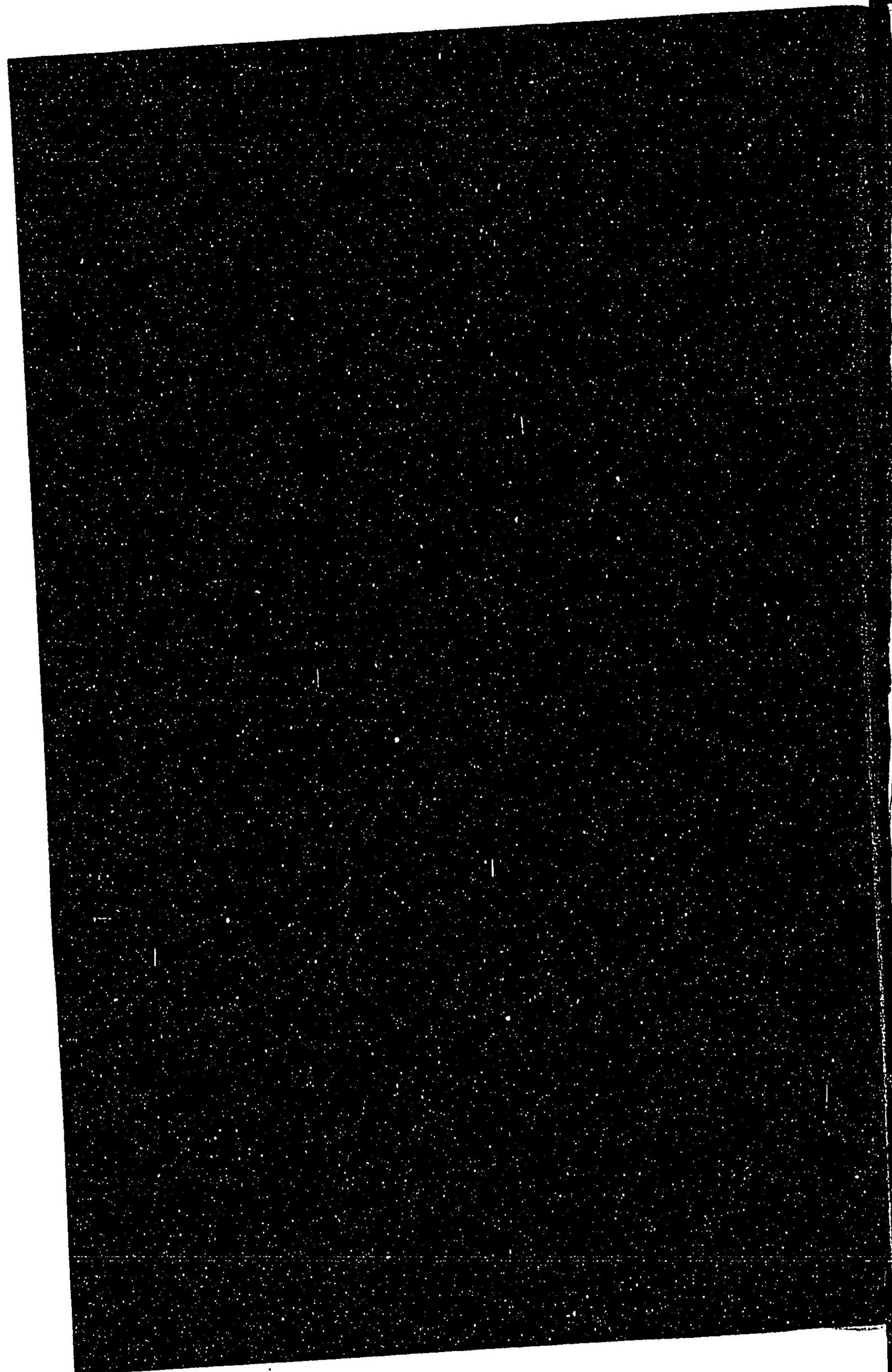
一 あふぎのお所いぢくなり、あふぎの御所三内の宮内  
てすめるはかなめなりふ、おりめにそたかさなる

柳田國男近業  
 後狩詞記  
 石神問答  
 時代と農政  
 舊日本に於ける銅の生産及其用途

樂橋堂發賣  
 近刊、同上  
 近刊

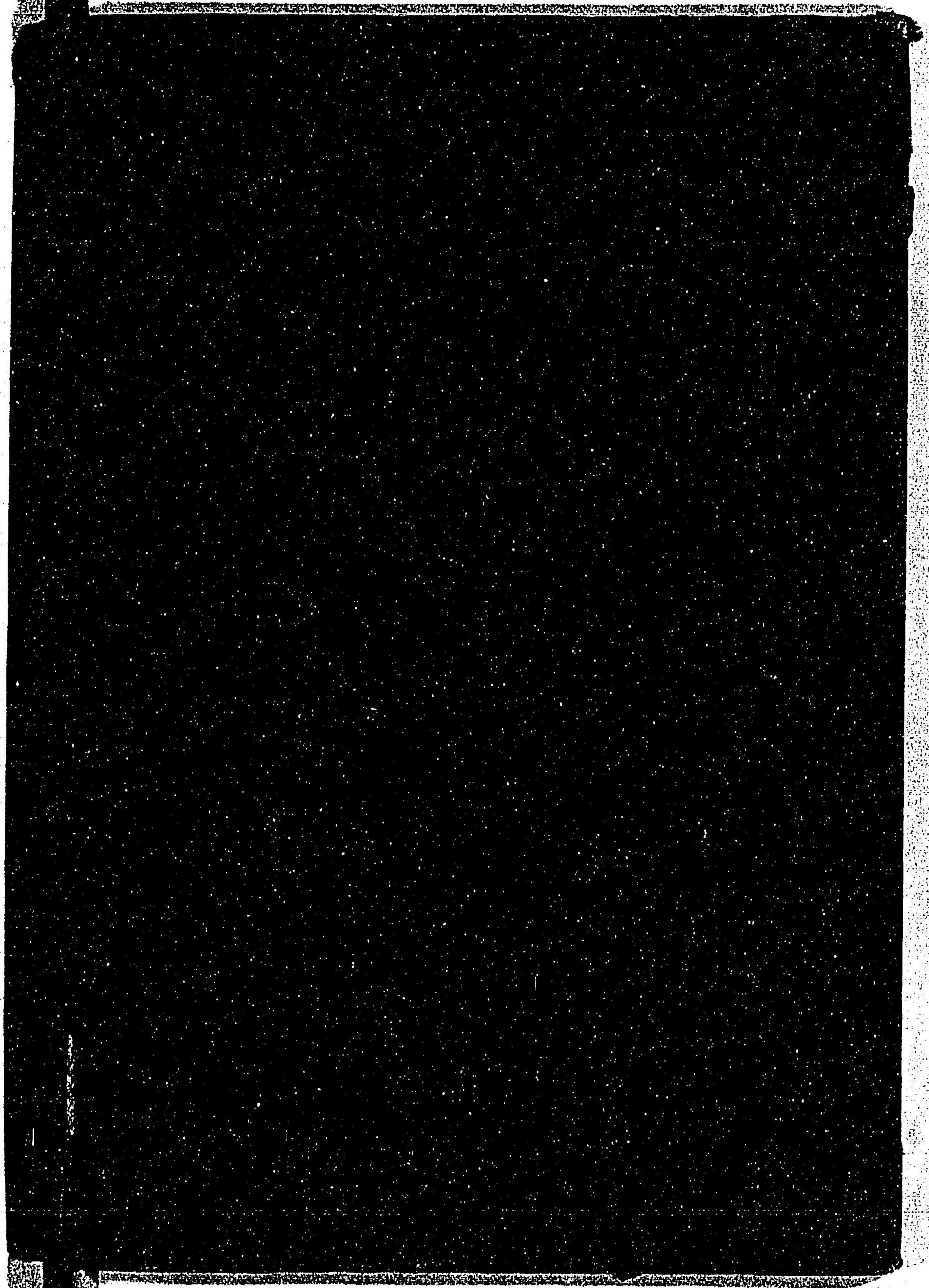
賣捌所 <small>(東京市本郷區龍岡町三十四番地 電話一六七二番)</small> 聚精堂	不許複製		
	印 刷 所 杏 林 舍	印 刷 者 今 井 甚 太 郎	著 者 兼 發 行 者 柳 田 國 男 <small>東京市本郷區龍岡町三十四番地</small>

明治四十三年六月十一日印刷  
 明治四十三年六月十四日發行  
 (實價金五拾錢)



2

327  
1269



327

268

027374-000-1

327-268

遠野物語

柳田 国男 / 著

M43

ADJ-0133



